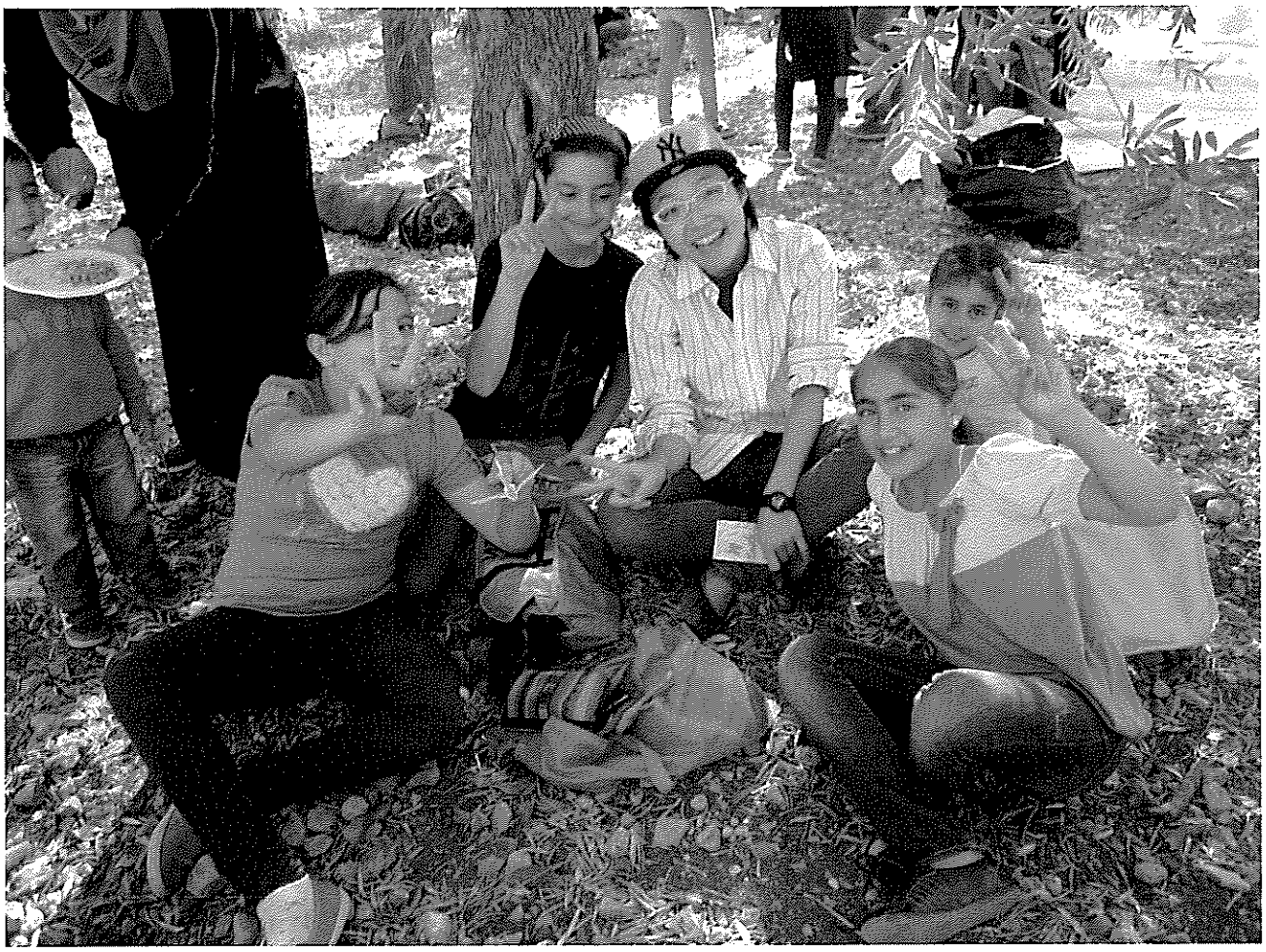
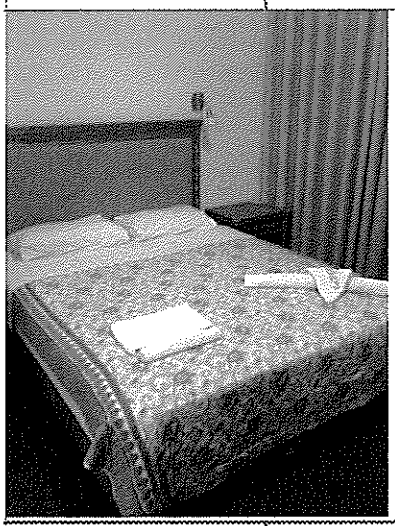
オリーブ収穫プログラム2014
報告書



2014年10月10～21日

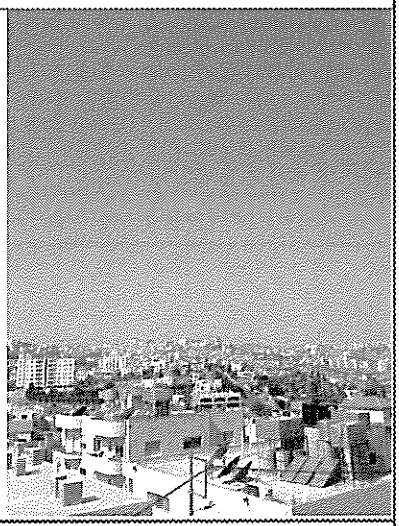
長尾有起

10月10日（金） 出発	成田空港から11:55出発。イスタンブールで3時間ほどのトランジットの後、現地時間23:20にテルアビブ（ベン・グリオン空港）着。飛行時間は合計14時間（12時間プラス2時間）程度。イスタンブール空港は結構広く、テルアビブへの乗り継ぎ便のゲート変更が途中であり、少々焦る。乗り継ぎ便のゲートでイスラエルへの渡航理由を簡単に審査された。日本人は私だけかと思っていたが、同世代の女性がおり、仲良くなる。これからパレスチナ支援団体で3年ほど働くとのことだった。テルアビブ到着後、入国審査前に1度イスラエル兵士に渡航理由を聞かれる。入国審査は5分ほどだったように思う。ただしやはり他地域よりもしっかりと審査された。一人で来たのか、いつも一人で旅行をするのか、渡航理由、何かプログラムに参加をするのか等聞かれた。 ゲートを出るとATGがアレンジしたタクシードライバーが待機してくれており（事前にATGに連絡が必要）、両替を済ませてからベイ・サフールのサハラホテルまで30分ほどのドライブ。イスラエル側からパレスチナ側へ出る方向であったこと、深夜であったことからホテルまでは1度も止められることはなかった。ただし、日中は開けられているチェックポントのゲートが夜間は閉められており、そこを開けてもらって通行するということをドライバーから聞く。ドライバーに40ドルを米ドル支払い（同行者がいればシェアできる）、午前2時頃ホテルにチェックイン。フロントスタッフが寝てしまっていたが、窓を叩いて起きてもらう。サハラホテルはwi-fi完備（パスワードがフロントに書いてある）、大変綺麗でお湯も水圧も十分。自分で旅行するときはいつももっと安いホテルを選んでいるので感動（と言ってもサハラホテルも1泊40ドルで決して高いホテルではないが）。就寝。



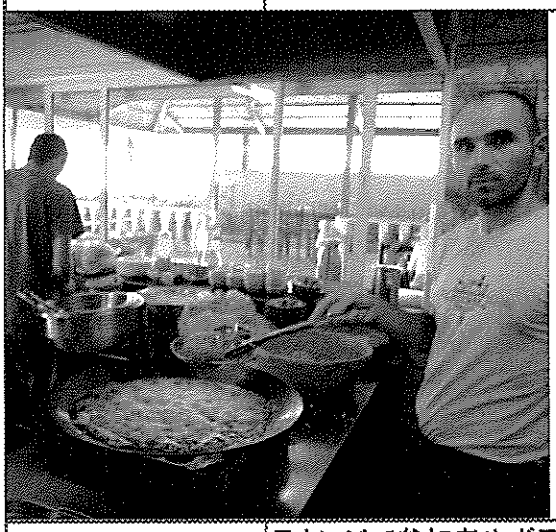
左：サハラホテルの部屋。
長旅でくたくた。

右：ホテルからの眺め。
パレスチナ、初日！



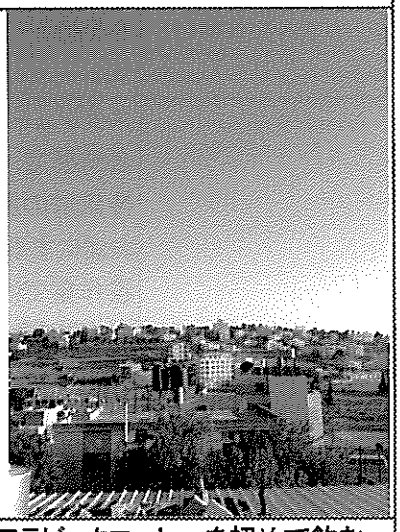
10月11日（土） チェックイン オリエンテーション	少し寝坊をし、身支度を整えフロント階に降りると、スタッフや参加者たちが受付を行っていた。大きいホテルではないので、期間中サハラホテルはこのプログラムで貸切のようだった。先にホテルのチェックアウトを済ませ、ラウンジに受付らしきテーブルが出ているのでそこで受付をする。参加費の支払いはここでは行わなかった。日程表などの資料一式と共にお揃いのTシャツと帽子を受け取る。今年の参加者は全部で80名ほど。夏のガザ攻撃の影響か、例年よりは少ないようだった。フライトの時間がそれぞれ異なるので、三々五々やってきて受付を済ませる。期間中の滞在場所をホテルかホームステイか選ぶことができるが、私はホームステイを選んだ。ステイ先はJAIスタッフでコーディネーターの一人でもあるイブラヒムの両親の家なので、彼が後ほど送ってくれるという。

昼近くになっていたので食事をできる場所を尋ねると、角を曲がったところにルツ・レストランというところがあるというので一人で行ってみた。入口がキッチンになっており、そこでファラフェルサンドと飲み物を頼む。揚げたてのファラフェル（ひよこ豆のコロッケ）がゴロゴロ入っているピタパン。上に野菜入りのヨーグルトソースがかけてあり、ものすごく美味しい！期間中ずっとそうだったが、東アジア人は（観光地以外の場所では）珍しいようで、お客たちにも結構注目される。会計は8ドル。今思うとちょっと払い過ぎな気もする。後で分かったことだが、パレスチナではパレスチナ人価格と外国人価格を（店主が当然こっそり）決めている店も多い。生きて行く知恵。会計後ファラフェルを作っているところの写真を撮らせて欲しいと頼むとキッチンの中まで入れてくれた。ひよこ豆を粗く砕いたものを手際よく成形し、油に入れていく（ファラフェルは衣をつけるのではなく、丸めたひよこ豆をそのままあげているということを初めて知る）。今揚げたばかりのものを一つ食べさせてくれた。お礼を言ってホテルに戻る。



左：ファラフェルを作っているところ

右：Hannouneh家のバルコニーから。かなりの時間をここで過ごした。

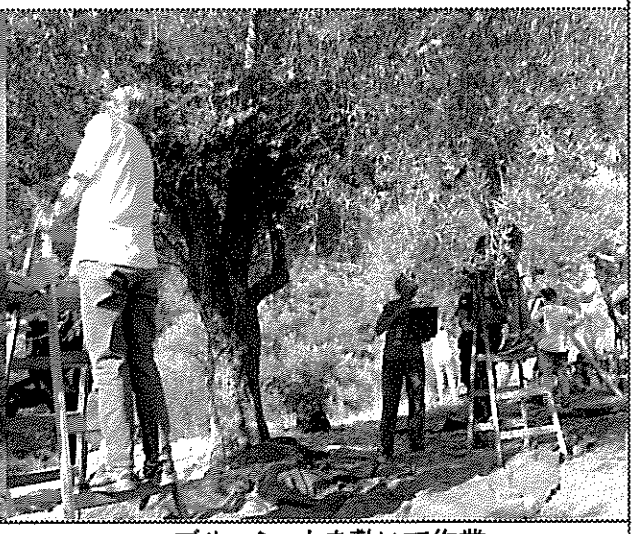


ラウンジで参加者やボランティアスタッフとおしゃべり。アラビックコーヒーを初めて飲む。とっても濃く、カルダモンの香りがする。イブラヒムと共にステイ先であるHannouneh家へ。ホテルから車で5分ほど。3世帯住宅になっており、2階が両親の住まい、1階にイブラヒム家族と兄のアナンの家族が住んでいる。ホストマザーのニッリ（後でつづりを聞くとNellyだった）、ホストファザーのウィリアムが歓迎してくれる。土曜はベイ・ジャラという隣町に住む娘がランチを食べに来ることになっており、既にサンドを食べていた私もお相伴に預かることにした（ベツレヘム、滞在したベイ・サフール、ベイ・ジャラはそれぞれ隣り合っており、これらの地域をまとめてベツレヘムとも呼ぶ。「東京」が都名であるのと同時に東京駅周辺のことも指すのと同様）。Hannouneh家は3人きょうだいで、一番下がルーワン。彼女は私より1つ年下で、二人の子どもイーサ（3歳）とアミール（1歳）を連れて来ていた。しばらくするとイブラヒムの息子であるザイード（7歳）とイェゼン（4歳）が加わり、すっかりにぎやかに。私も一緒に遊んでもらう。折り紙を持ってきていたので、手裏剣を作ってあげると楽しそうにニンジャごっこをしていた。おしゃべりをしたり、荷解きをして午後を過ごす。子どもたちがテレビを見ていたが、日本のアニメだったのでびっくりした。ちなみに『赤ちゃんと僕』と『小公女セーラ』。吹き替え版だったので、知っているキャラクターがアラビア語を話しているのは面白かった。wi-fiも使うことができた。家はかなり立派で、バルコニーからの眺めがすばらしく、そこでウィリアムと少し話す。静かで美しいベイ・サフールの街を彼は愛し、誇りに思っていた。彼は自分の家族はギリシア正教だが（壁には母子像のイコンが飾られていた）、向かいはムスリムだし、隣はイングランド人のバプテストの家で、自分たちはとてもフレンドリーに生活をしている。

	だが指さした先、1kmほど離れたところにチェックポイントの監視塔があり、今こうやってバルコニーで話している自分たちのことも見ているんだよ、と教えてくれた。なお、ベイ・サフールでは6割がクリスチャンで（そのほとんどがギリシア正教徒）、4割がムスリムとのこと。
	夕食後、イブラヒムと一緒にATGのオフィス（車で5分弱）へ行き、名札を受け取って20時から顔合わせとオリエンテーションを行う。このプログラムは今回で11回目。ホテルグループとホームステイグループにの二つに分かれてプログラムを行うとのこと。ホームステイグループは30名ほどで、スウェーデン、ノルウェー、デンマーク、オランダ、スイス、フランス、スペイン、スロヴェニア、キプロス、イングランド、スコットランド、アメリカと、ほぼ欧米からの参加。こちらのグループに日本人（というか東アジア人）は私一人だった。年齢、性別もばらばら。同世代はボランティアスタッフを含め6～7人。一番の高齢はロンドンから来たMargaretta。彼女はなんと80代だった！（ものすごくクリアな頭と、柔軟な心を持っている素晴らしい人。）初参加とリピーターの割合は半々ぐらいだったように思う。
	スケジュールの簡単な確認と、注意事項。オリエンテーションでまず強調されたのは集合時間で、毎朝8時に集合。これに遅れなければ大丈夫。水回りのこと。パレスチナでは各家庭の屋上にあるタンクに水を貯めて使っており、それをソーラーシステムで温めてお湯にするので、シャワーは朝ではなく夜に浴びるほうがよいとのことだった（オリーブ収穫作業では土埃まみれになるのでありがたかった）。期間中タンクの水が足りなくなることはなく全く不便を感じなかったが、当然、無駄に使うことはできない。 収穫作業について。この収穫をインターナショナルに手伝うのは単なる労働力という意味だけではない。収穫をさせてもらう畑の持ち主はみな、入植地などから近く、常に入植者やイスラエル兵からハラスメントを受ける危険がある。イスラエル側は「外国人」に対してはハラスメントをしづらいので、そのようなサポートのためにインターナショナルに作業を行う。注意してほしいのは、場合によっては、エリアC（後述する）にある畑ではイスラエル兵が来るかもしれないが、その際は参加者たちは収穫作業を続け、兵士とのやり取りは農家に任せること、と強調された。
	オリエンテーション後、かなり立派なパレスチナのガイド本を無料でいただく。パレスチナ関するガイドのほとんどは外国人によって書かれているが、この本はパレスチナ人によるパレスチナガイドであるとのこと。その後、プログラムの参加費を支払う（初日のホテル代も一緒に支払った）。私のルームメイトはイングランドから来たロビンという女性。彼女はベン・グリオン空港で足止めをくらい、オリエンテーションが終わって帰宅してから到着した。シャワーを浴び、就寝。
10月12日（日） オリーブ収穫	期間中のスケジュールはほぼ毎日同じパターンで、ステイ先で朝食後、8時にATGオフィスに集合。そこから貸切バスに乗り、午前中にオリーブ収穫作業をし、畑の持ち主と昼食。午後はフィールドワークもしくは現地のNGOなどで話を聞く。一度17時～18時くらいの間にステイ先に帰って夕食を取り（この時にシャワーを浴びることが多かった）、20時に再びベイ・サフールYMCAに集合し、レクチャーを受ける。この夜のプログラムのみ、ホテルグループと一緒に行った。なお、予定では夜のプログラムは19時半からだったが、参加者からの希望で20時に変更された。
	収穫作業1日目はWalajaというベツレヘムの西側の地域で行った（どの農家もATGオフィスからバスで30～50分ほどであった）。移動中にコーディネーターからいくつかの話を聞く。パレスチナの産業は40%が農業であり、その半分がオリーブ栽培であること。オリーブの木は放っておいても実をつける優秀な木で（もちろん手入れをすればその分たく

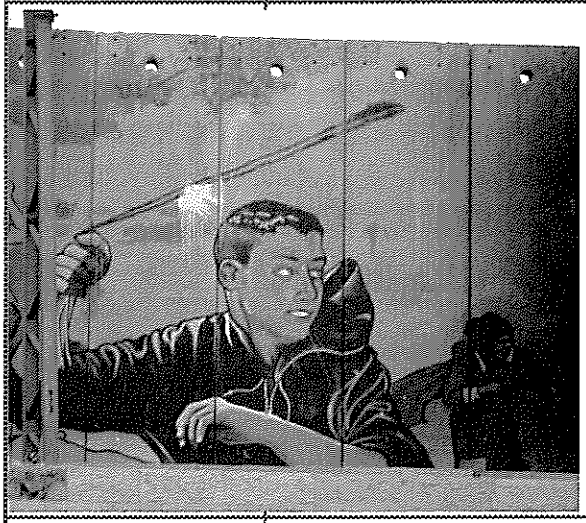
	さん実をつけるが)、広い農地でも大丈夫であること。それはまた、イスラエル兵からのハスメントを避けて畑に行けなくても大丈夫ということでもある。しかし同時にその人の出入りの少ない農地を奪おうとイスラエル側が狙っているということもある。作業をする農家では、まず始めに農家の話を聞く。これがこのプログラムで大事なことだと説明があった。というのは、パレスチナ人の多くは世界から見放されていると感じていることも多く、自分の存在が取るに足りないものだと考えてしまっている。常にイスラエル兵からのハラスメントの危機にさらされ、イスラエル当局によって農地を奪われている。彼らがどのように土地を奪われたか、どんな苦労があるか、普段の生活はどうかなど、彼らが持っている「ストーリー」はそれぞれ異なるのであり、それを世界からやってきた人たちに語り、聞かれることは、それ自体が彼らの尊厳回復とエンパワメントになるからだ、ということだった。そしてそれをぜひ自分の国に持ち帰り、身の回りの人に話してほしい、パレスチナで「生きている」人たちのことを知らせてほしい、と。
	この畑の持ち主はOmar Hajajraさん。アラビックコーヒーを振舞いながら一生懸命に話してくれた。この畑はAl-Walaja村のEin Juwarehと呼ばれる地域にあり、Har Giloという入植地が1km先に建設中である。さらにGiloという別な入植地がわずか500m先にある。2011年、彼と家族がイスラエル兵による深刻なハラスメントと攻撃に苦しんでいる間に、入植者たちが18本のオリーブの木を抜いてしまい、現在は分離壁の向こう側になってしまった土地を奪っていった。イスラエル兵による暴行により、子どもは後頭部に大きな傷が残っている。
	話を聞いた後、バスに積んであった脚立、ブルーシート、バケツなどを持って畑に入る。ここの畑は斜面に段々畑のようにしてオリーブの木が植えてあり、見晴らしも大変よかった。オリーブの収穫作業は非常にシンプルで、すべて手作業で行う。まず、(木の大きさにもよるが)4～5人のグループに分かれ、木の下にブルーシートを広げて、細い枝に鈴なりになっているオリーブの実を手でしごいて落とす。それぞれの実の熟し具合には関係なくすべて収穫し、1本の木が終わったら大きな枝などをおおまかに取り除き、実をブルーシートからまとめてバケツに移し、一箇所に集め、次の木に移っていくというやり方だ。枝の高いところは脚立を使ったり、幹に登って収穫する。それぞれができることを、できるペースで行う。農家が用意してくれたコーヒーや紅茶を飲んで適宜休憩を取ったり(このお茶はどこの農家も用意してくれていた。またペットボトルの水をJAIが用意してくれている。

オリーブ畑の様子。



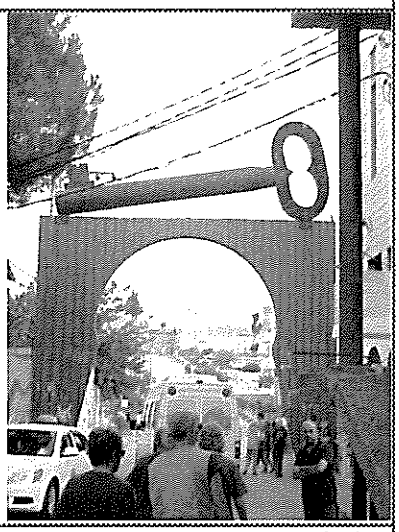
ブルーシートを敷いて作業。

	小腹が空いた時用に自分でお菓子などつまむものを用意しておくことをおすすめ)、おしゃべりをしながら作業を進める。初日ということもあり、みんなちょっとはしゃぎつつも慣れない手つきで収穫しながら、どこから来たのか、どうして参加したのかなど、隣り合った人と話していた(日本では何をしているのか聞かれ、牧師だと答えると毎回驚かれた。ま、それは日本でも同じ)。
	3時間ほど作業をした後、オリーブの木の下でみんなで昼食。骨つきの鶏肉と一緒に炊き込んだターメリックライスに、トマトときゅうりのサラダ、そこに甘くないヨーグルトをかけて食べる。これはパレスチナではオーソドックスなメニューのようで、プログラム中何度か食べた。ものすごくおいしい。なお、参加者の中にはベジタリアンも多く、野菜のみのメニューも毎回用意されていた。 日本に帰国後、それぞれの日のオリーブ収穫量をスタッフがまとめて送ってくれた。それによるとこの日は400kgのオリーブを収穫し、80kgのオリーブオイルが取れたとのこと。
ベツレヘム フィールドワーク	食事が済むと農家に別れを告げ、午後はベツレヘムでのフィールドワークを行った。Iyad(イワッド)というコンダクターから話を聞きながら、分離壁などを見学。高さ約8mの分離壁は、近くに行くと想像よりもさらに高く感じ、威圧感がものすごい。壁のパレスチナ側に描かれたグラフィティを少し見て回る。巨大な羊が泣きながら荷馬車を引っ張っている絵、"Wall Street"という皮肉、大きなハートが壁をこじ開けようとしているもの、反対にハートが引き裂かれているもの。"Wall museum"というプロジェクトで、パレスチナの女性たちが実際に体験した「ストーリー」をポスター状にして貼ってある一角もあった。



左:アイダキャンプ近くの分離壁に描かれたグラフィティ
分離壁の高さは8m

右:アイダキャンプの門
鍵穴と鍵

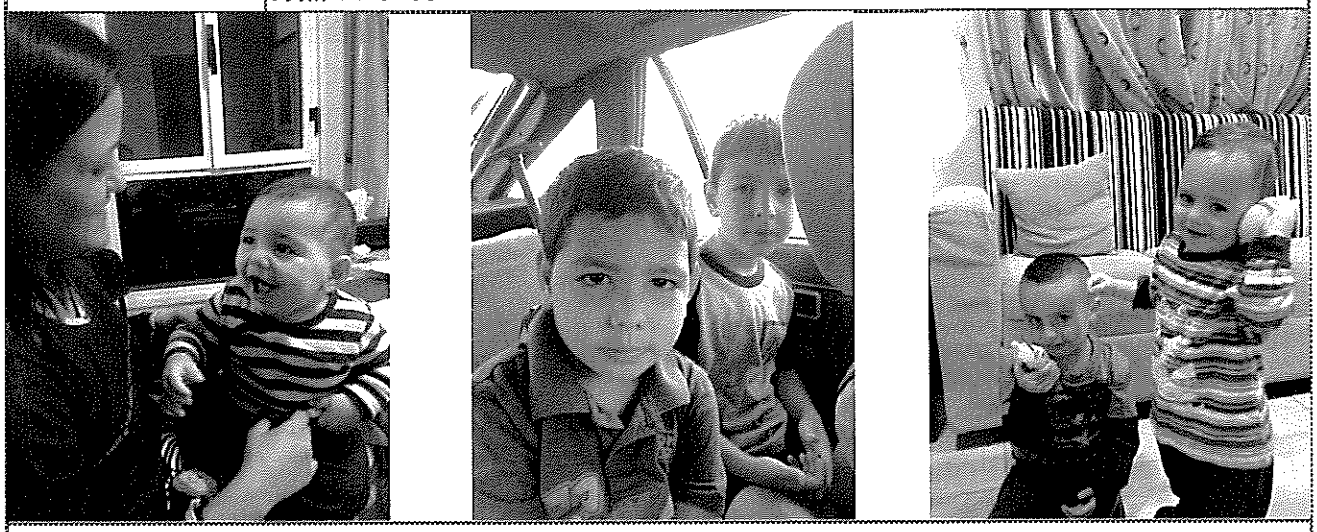


	西岸地区において、2002年から作られ始めた分離壁は、計画の内の既に60%に完成しているが、そのほとんどはいわゆる壁ではなくフェンスである。イスラエル側は「国家防衛のため」に分離壁を建設していると言っているが、それは真っ赤な嘘である。2000年の第二次インティファーダは自分を含めてみんなが参加したが、それは非暴力的な抗議行動だった。しかしイスラエル側は最新兵器でパレスチナ人を制圧した。現在は国連が使用している小学校は、ある路地の側をインティファーダの時に窓ガラスからコンクリートの壁へと変えた。せめてもの反抗として石ころを投げるパレスチナ人に対し、イスラエル側がその小学校に面した路地で銃撃戦を仕掛けてきたからだ。
	イスラエルは防衛、守るためではなく、土地を奪うために壁を作っている。ある場所では、壁とその奥にあるイスラエル入植地が見えるが(写真参照)、2002年に壁が作られる前には入植地はもっと遠くにあった、それが壁が出来てからその範囲を広げ、どんどん近くなっているという。1967年(第三次中東戦争で西岸地区とガザ地区がイスラエルに

	よって占領された年）以降、パレスチナの土地の70%がイスラエル側に収奪されてきた。それによってパレスチナ人の60%である600-700万人（注：統計によるがここではそう聞いた）が難民になっている。なお、パレスチナでは国外への難民だけではなく、元々住んでいた場所から移動せざるを得なくなった人々を含めて難民と呼ぶ。よって元の家から数km移動した人や、車を所有している人もいるが、それによって困難の度合いをはかることは当然できない。みな国連によって難民としての登録カードを持っている。その内150万人がパレスチナ内の難民キャンプで暮らしている。パレスチナには国連認定されている難民キャンプが56箇所あるが、ベツレヘム地域には3つあり、そのうちの一つであるAida campを訪れた。Aida campの門は鍵穴の形になっており、巨大な鍵がその上に乗っている。これはAidaに限らず難民のシンボルとなっており、家から退去させられた時に鍵を閉めて出てくることしかできず、荷物を運び出す余裕などなかったことを示している。また入口には黒くぬった壁に白で「我々の子どもたちが殺されるとき―2014年7月にパレスチナでイスラエルによる大虐殺によって殺された子どもたち」と書いてある場所があり、そこには300近い子どもたちの名前が記されていた。
	Aida campで話を聞いていると、たくさんの子どもたちが遊んでほしいと集まってきた。また一方で、キャンプの路地を歩いていると建物の向こう側からざくろの実を投げつけられたことがあった。イワッドはこんなことは初めてだ、どういう意味かわからないと言っていた（しかし日本に戻ってから昨年の参加者から同じことがあったと聞いた。なお、コンダクターは別の人）。ざくろの実が投げられた意味はわからないが、Aida campは見学者が非常に多く、引っ切りなしに「外」からの人が訪れる。自分たちは見世物ではない、何もしないくせに自分たちの生活を邪魔するなという抗議だったのではないか、と私は思っている。
	分離壁が国家防衛のためではないことを示す別な例として、数km離れたところにある丘を見ながら説明を受けた。見えているのはある区画が四角く分離壁で囲まれている場所。そこは聖書に出てくるヤコブの妻であるラケルの墓とされている場所で、聖地であるためイスラエル側が収奪し管理している。しかも、遺跡の面積の倍ほどの広さで分離壁で囲んであるのだが、それはなんと観光客用の駐車場があるためにその広さになっているとのことだった。これのどこが「国家防衛」なんだ!?とイワッド。またある道路では数kmの間に3つのチェックポイントがあり、虫食い状に入植地があることを示している。パレスチナ人はまっすぐ道路を通過することはできず、迂回しなければならない。
	他にも、（イスラエルを含んだ）パレスチナ全土において、水の7割が西岸地区から出ている。しかし水道を「管理」しているのはイスラエルで、パレスチナ人は自分たちの暮らしている土地から出ている水をイスラエルにお金を払って買わなければならない。また、その水のうち、15%しかパレスチナ人は使うことができないということを聞いた。入植地では文字通り「湯水のごとく」水を使い、乾季であっても緑が豊かに茂っている。一方でパレスチナの人々は水道が週に2～3度しか通らないため、貯水タンクを屋上に設置し、そこから水を使っている。しかしそれも全員ができるわけではない。西岸地区に住む300万人のパレスチナ人のうち、200万人しか水道を使うことはできないという。（追記：帰国後にヘブロンに行った友人から聞いた話によれば、ここでボランティアをしたいと言ったところ、水のリサイクル―顔を洗った水を食器洗いに使い、洗濯に使い、最後にトイレを流すのに使うというようなこと―に耐えられるのであれば来てくれ、と言われたとのこと。地域にもよるだろうが、このオリーブツリーキャンペーンでホームステイをさせてくれる家庭はどこもパレスチナ人の中では裕福なのだと思う。）

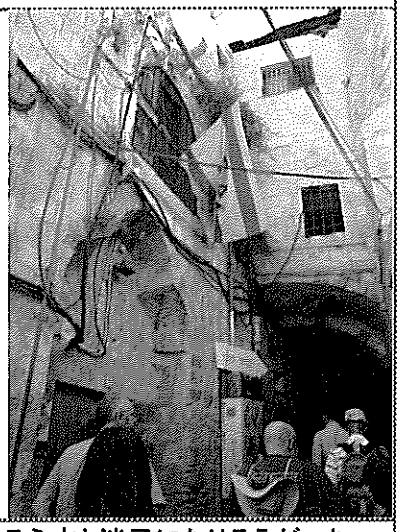
	Aida campを離れ、ベツレヘム旧市街へと向かう。バスから見える景色はだんだんと活気づいてくる。降誕教会の前の広場で1時間ほど自由時間になった。私はイワッドが案内してくれるというので生誕教会を見ることにした。聖地の一つである生誕教会（Church of Nativity）は名前の通り、イエスが生まれたとされている場所に建てられた教会。イワッドによれば、キリストは家畜小屋で生まれたと信じられていることが多いが、当時のパレスチナのことを考えれば、家畜は洞窟の中で飼われていたのであり、イエスも洞窟の中で生まれただろうということだった（確かに聖書には「飼い葉桶」という言葉が出てくるだけで、家畜「小屋」で生まれたとは書かれていない）。実際、この教会も洞窟の上に建てられており、イエスが生まれたとされているその場所は階段を降りて行った先の洞窟の中にある。教会の中には小礼拝堂がいくつもあり、熱心に礼拝をしているグループもいた。私はキリスト教の牧師をしているが、聖地と呼ばれるものに信仰的な意味では興味がないので、なんとも不思議な気分になった。歴史的な意味では面白いが。他にもこの教会にまつわる伝説も色々と聞いたが、ガイドブックなどに載っているであろうので割愛。
	イワッドはパレスチナ人でありクリスチャンであるが、教会の中でこんな話をしてくれた。自分が人種的にどのようなルーツがあるのか血液検査で調べることができるが、イスラエルに住むユダヤ人たちに流れている古代のユダヤ人（つまりキリスト教でいうところの「旧約聖書」に出てくる人々）の血の割合（の平均値）よりも、自分（イワッド）に流れている古代ユダヤ人の血の割合の方がずっと高いことが分かった。聖書に基づいてここが「ユダヤ人」の土地なのであれば、やっぱりここ（パレスチナ）は（イスラエルのものではなく）俺の場所なんだよ、と語気を強めて言っていた。ここで参加者と議論になる。ユダヤ人を「血」の問題にしてしまうと、ホロコーストの二の舞になってしまう、ユダヤ人というのは人種ではなくユダヤ教を信じている者を呼ぶのだ、そもそもパレスチナ人というのはパレスチナという場所に住んでいる人の総称であって、人種も宗教も関係ない・・・などなど。なかなか話は収まらなかったが、私はどちらも結局同様のことを言っているように感じた。それは最後にイワッドが言っていた"Who's Jewish? Who's Palestinian?"ということだ。イワッドはイスラエルが「ここはユダヤ人の土地だ」と暴力的に言い張るのに対し、俺の方がよっぽど「ユダヤ人」なんだ、ということはアイロニカルなアンチテーゼなのだ。確かにイワッドはちょっとアンチ・セミティズム（反ユダヤ主義）なきらいがあるようにも感じたが、それはパレスチナに暮らすパレスチナ人である彼の痛みから来るものであろうし、そもそもここでの議論では彼はイスラエルが提示する「ユダヤ人」なんていう概念は曖昧で、恣意的に操作できるものであると言いたかったのだと思う。先述のようにパレスチナ人とはパレスチナに暮らす人の総称で、イスラエル建国前はパレスチナ人クリスチャンも、パレスチナ人ムスリムも、パレスチナ人ユダヤ人もいて折り合いをつけながら一緒に暮らしていたのだ。結局イスラエルとパレスチナの問題は宗教や人種の問題ではなく、それを隠れ蓑にした政治とカネの問題であることがわかる。
Night Program "The Stones Cry Out"	帰宅するとみんな玄関ポーチでくつろいでいた。アナンとその連れ合いのナヴィーン（Navine）とおしゃべり（実はこの時までルーワンのパートナーがアナンだと思っていた。実際はその二人はきょうだい）。庭になっているレモンを剥いて、塩をかけて食べていてびっくり。また「パラダイスフルーツ」という果物を食べていた。未だに調べてもあれが何だったのかわからないが（たぶんチェリモヤだと思う）、毎日数個食べると癌が治るぐらい、体によいのだそうだ。この夕方ののんびりおしゃべりをする時間はとてもよかった。ウィリアムともしゃべる。ベイ・サフールでは最近空いている土地が少なくなり、地価が非常に上がっている（1㎡あたり500ドル！）。アナンもイブラヒムも今別な場所に家を建てて

	いるが、とてもお金がかかるので、時間をかけ、お金がある程度貯まったらこの部分、また次の部分と少しずつ家を建てているのだという。完成するまでは自分のこの家に住まわせることにしている、ということだった。シャワーを浴び、夕食。この日のメニューは白身魚のフライ。



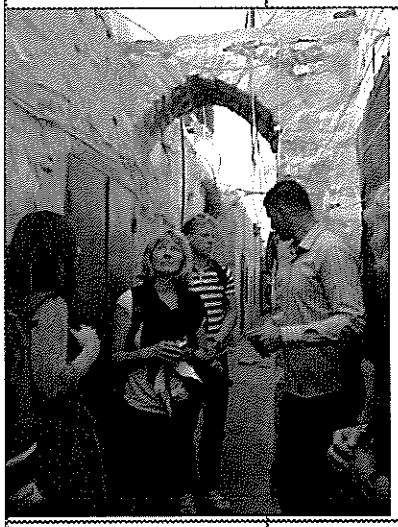
Hannouneh家のこども(孫)たち。

	夜のプログラムに出かける。この日はYasmine Perniという監督の"The Stones Cry Out"(『石が叫び出す』の意。ルカによる福音書19章の「人が黙れば、石が叫び出す」という聖句による)いうドキュメンタリーを観る。これはナクバ(1948年の大虐殺)以降のパレスチナ人クリスチャンへのインタビューが主なテーマとなっている。世界的に忘れられがちであるが、キリスト教は2000年前にパレスチナで生まれ、中東を経由して世界に広がった。そして今でもパレスチナ内にクリスチャンは暮らしており、ムスリムたちと共にイスラエルから支配され、抑圧されているが、彼らの声はたくさんの事件の中で埋もれてしまっているのである。ヨルダン川での洗礼や、棕櫚の主日の礼拝を壁の上からイスラエル兵が監視しているシーンは非常に印象的だった。ベツレヘムやベイ・サフールで起こったこともたくさん語られており、この映画の内容はベイ・サフールYMCAのアイデンティティの一つでもあるのだろうと思った。
10月13日(月) エルサレム フィールドワーク	3日目はエルサレムでのフィールドワーク。この日はいつも一緒に行動しているイブラヒムは同行できない。なぜなら、エルサレムの市民権を持っていないパレスチナ人は自由にエルサレム地区に入ることはできないからだ。代わりに海外からのボランティアスタッフ(青年層が3ヶ月ほどJAIでインターンを行うことができる)がリーダーとして同行し、エルサレム内の案内はエルサレム市民権を持つパレスチナ人コンダクターが説明を行ってくれた。バスでエルサレムに向う途中、ちょっと緊張が走ったのは、途中のチェックポイントでイスラエル兵がバスの中まで入ってきたことだ。私たちは「単なる観光客のフリ」をし(まぁ実際「単なる観光客」に違いはないのだが・・・)、問題なく通過できると思っていたのだ。結局イスラエル兵士たちは中をちらっと見ただけで、パスポートチェックがあるわけでもなく(念のため、この日は全員パスポートを携帯するように言われていた)、ほんの数分でチェックポイントを通過した。
	エルサレム市内に入ると、一気に看板がヘブライ語表記になったことに気づく。道路標識はヘブライ語、アラビア語、英語の順に併記されている。また道の状態もよく、ピカピカの外国資本の店が並ぶ。当然、日本の企業(例えば目に付いたのはスズキ)もある。先述のように家の庭には緑が生い茂っている。スプリンクラーでふんだんに水を与えているらしい(イスラエル入植者の家はプールがあることも多いと聞いた)。

旧市街	1時間弱のドライブの後、ダマスカス門（エルサレム旧市街への東エルサレム側の門）の前でコンダクターと会い、まず門の前の広場で話を聞く。この門は英語ではダマスカス門と呼ばれるが、アラビア語ではバーブ・アル・アムード（柱の門）、ヘブライ語ではシェケム門と呼ばれ、それぞれ意味が異なる。150年ほど前までは1㎢のみの小さな旧市街をエルサレムと呼んだが、現在では旧市街の中が非常に混み合っていているので、門の外にまで街が広がり、こちらもエルサレムという行政区になっている。旧市街の中は大きく4つの地区（ムスリム地区、キリスト教地区、ユダヤ人地区、アルメニア人地区）に分かれているが、このように宗教によって分けるのはローマ時代のやり方だという。古代からの都市ではあるが、「発展」と称してすっかり近代的な街になってしまっているとのこと。
	門の中に入ると、そこここにイスラエル当局による監視カメラがある。1㎢しかない旧市街に600ものカメラが設置されている。中には、窓を開けたら家の中まで監視されてしまうので、365日窓もカーテンも閉めたままにしている家もあるという。そうやってパレスチナ人へのプレッシャーをかけているのだ。イスラム教の最も重要な聖地の一つであるアルアクサ・モスクは、私たちが訪れたときには、入れる時間と場所を宗教や国籍で分けており、イスラエル兵がその管理を行っていた。そして、基本的にはムスリムたちは中に入ることができず、（いつになるのか分からない）開くのを待って並んでいるのである。アルアクサ・モスクの境内には学校もあり、勉強をすることができない子どもたちも大勢いる。また、以前は女性はモスクに入ることができたが、境内の中でデモを行ったために、現在は入れなくなってしまったという。結局、今アルアクサ・モスクに入ることができるのはユダヤ人入植者だという。私は英語を聞き間違えたのかと思った。「ユダヤ人」である彼らがイスラム教のモスクでいったい何をするのか分からなかったからだ。すると参加者の一人が全く同じ質問をしてくれたのだが、コンダクターは全く分からない、という表情で「やつらは＜何でも＞したいのさ」という答えだった。
	ダマスカス門からスーク（市場）を通り、ヴィアドロローサ（苦難／悲しみの道の意。キリストが十字架を背負って歩いたと言われている）との交差点のところにオーストリアのホスピスがあるのだが、そこの屋上が旧市街を一望できる穴場になっていた。そこではパレスチナ人が病気になった場合、がんなどの重病の場合はエルサレムにある3つの病院しか使えないということも聞いた。
	左：ダマスカス門の 3つの名前 右：イスラエルに収奪された パレスチナ人の家 狭い道のあちこちに 監視カメラがある 
	エルサレム旧市街は非常に入り組んでいてちょっと気をそらすと迷子になりそうだったが、今自分がいる場所が「ユダヤ人地区かそうでないか」は一目瞭然だった。それは道行く人たちの服装というよりも、建物や道の綺麗さが段違いだからだ。ユダヤ人地区は

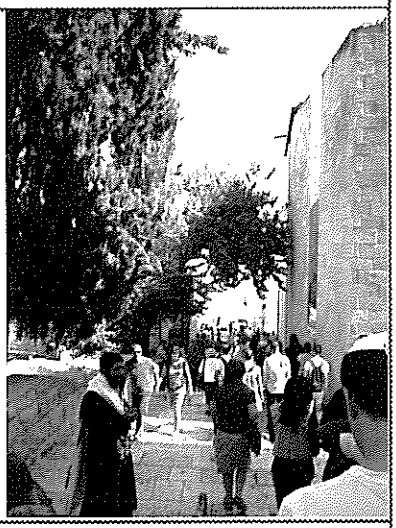
明るくピカピカで観光客もたくさんおり賑わっている。このユダヤ人地区では、モスクへの案内表示すら出すことができないという。一方、ムスリム地区は道も建物もかなり傷んでいる場所も多い。ある場所では、家屋の修復工事を行っていたのだが、そこはイスラエル側が何かのために地下を掘っており、そのせいで地盤沈下が起こって建物が崩れてしまったのだという。イスラエル側から地下を掘っていることへの事前の通知はなかった。また別の場所では、ムスリム地区であるにもかかわらずエルサレムの国旗が掲げられた家があった。ここは元々パレスチナ人が住んでいたが、セキュリティのためと言ってイスラエル当局によって収奪されてしまったのだという。

エルサレムの住宅事情は非常に悪い。旧市街があまりに狭いためにみな小さな家に住むしかないのだ。新しい家を建てるのにはイスラエル側の許可が必要であるが、その許可を得るための手続きの方が家を建てるよりもお金がかかってしまうという。旧市街の住民はエルサレムのIDを持っているのだが、ほんの数年エルサレムの外に出てしまうとそのIDは取り消され、許可なしにはエルサレムに入ることすらできなくなってしまうし、元住んでいた場所はイスラエル当局に収奪されてしまう。では旧市街の家を残したまま、別荘のように外に家を建てた場合はどうか。なんと実際旧市街内の家屋に人が住んでいるのかイスラエル当局がチェックをしにくるのだという。あるムスリム地区の住居は集合住宅のようになっており、一つの家は4㎡しかない。そこに平均して4人住んでいるのだという。その小さな家に住んでいるのは貧しい人たちではなく、弁護士や医者であるのだという。お金をかけて外に住むのではなく、そこに留まり続けているのだ。パレスチナ人にとっては、エルサレムに住み続けること自体がイスラエルへの抵抗運動になるからだ。



左：旧市街、ムスリム地区の集合住宅。
左側の青いドアが入り口。4㎡に
平均4人が住む。修理をするのも
道が狭くて非常に困難。

右：旧市街、ユダヤ人地区。建物も道も
非常に綺麗で賑わいもある。
左の写真の道幅と比べてほしい。
わずか1㎢の中にどちらも存在する



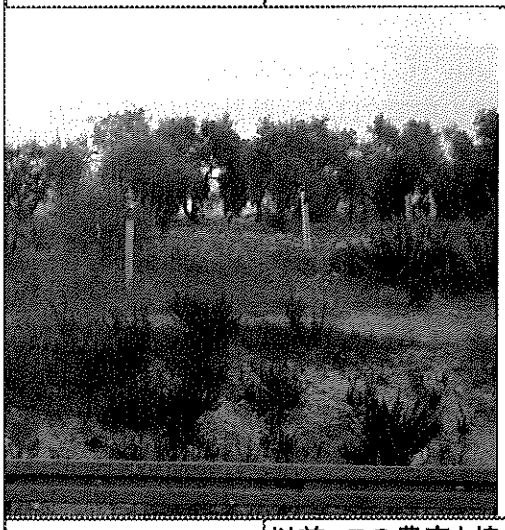
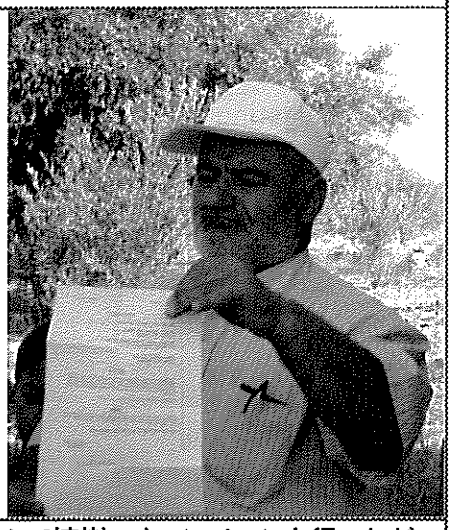
パレスチナ人にとって住居を建てることはエルサレム以外であってもイスラエルがわの許可が必要になるが、入植者にとっては非常に簡単である。イスラエル側は入植地に政府が家を建て、入植者たちはそれを借りたり買ったりするだけでいいのだ。それがイスラエルの「法」だ、法はみんなのものであるはずなのに、とコンダクターは言っていた。

旧市街内は通りごとに問屋街になっており、ある通りは布製品を取り扱っており、一番美しいマーケットで知られていたという。しかし、その通りはアルアクサ・モスクに通じており、モスクが閉められてからは人々の足が遠のき、ほとんどの店が閉められてしまっていた。観光客も通らなくなり、仕事がないのである。

アルアクサ・モスクの入口の近くで、Ali Jiddaという人物に会った。彼はアフリカ系パレスチナ人である。地図にはないが、旧市街には40家族のアフリカ系パレスチナ人が住む小さな地区があるという。Aliは80歳だと言っていたが、アフリカ系パレスチナ人の2世であるとのことだった。ナイジェリアやスーダンから来た人々だという。彼にインタビューをした

	DVDを買い求める。自分たちがいることを覚えておいてくれ、と彼は言っていた。
	旧市街は建物同士がくっついて建てられており、屋上も繋がっているのでここを歩くことができる。ユダヤ人のラビの学校の横を通り、屋上に上がる。イスラエルの教育についても少し聞く。彼らの教科書にはホロコーストについての長い記述はあっても、ナクバについては教えないという。
	旧市街を案内してくれたコンダクターは30代で、第二次インティファーダに参加し、これまで3回イスラエル側に逮捕され、計3年捕まっていたという。最初に捕まったのは19歳で、6ヶ月収容されていたとのこと。エルサレム旧市街の案内は許可を受けた者しかできないが、できる限り続けていきたいと言っていた。
	私たちが旧市街を訪れたのはちょうどユダヤ教の仮庵の祭の期間中で、ユダヤ教徒たちの多くは棕櫚の枝を持ち歩いている人も多かった。また、旧市街周辺のイスラエル兵は他の地域と比べてかなり重装備だった。そして、ものすごい人混み。
東エルサレムYWCA	旧市街を離れ、エルサレム市内にある東エルサレムYWCAで昼食とレクチャー。ランチのメニューはチキンだったが、グリーンのソースがかけてあり、聞くとモロヘイヤのソースであるという(最初はムルフニーヤとかムルキーヤと聞こえて分からなかったが、味とトロトロ具合から分かった)。アラブ諸国ではよく食べられているが、欧米からの参加者たちは初めて口にする人たちも多かったようだ。
	食事後、UCC(アメリカのプロテスタント合同教会。United Church of Christ)からの宣教師であるLoren McGrailさんから東エルサレムYWCAの活動について話を聞く。映像を見ながらのレクチャーだったが、印象的だったのは"The Fabric of Our Lives"(私たちの命／生活の織物)という難民女性たちによる人形制作のプロジェクトだ。この人形はパレスチナのそれぞれの地域に伝わる伝統的な衣装を着て、それぞれ名前もついている。その衣装を女性たちに作ってもらい、売上を支援に回すのだ。ヤッファ、ガザ、ヘブロンなど、それぞれの地域に独特の刺繍図面があり、女性たちは自分たちの「ストーリー」の思いを込めて針仕事をするのだという。パレスチナでは宗教や社会的慣習から離婚は難しいが、女性が一人でも生きていくことができるようにYWCAでは支援をしているとのことだった。他にも、子どもたちの教育プログラムや、女性の就労支援についてのレクチャーがあった。これについては"The YWCA of Palestine: Empowering Women, Promoting Equality"という動画をyoutubeで見ることができる。
エルサレム フィールドワーク	その後、旧市街を少し離れたところから望める場所で別のコーディネーターによるフィールドワーク。エルサレム旧市街は1948年までは今ほど区分けがはっきりしておらず、モザイク状の街であった。しかし西エルサレムと東エルサレムに分かれて以降、境界線が厳しくなったという。1952年には6000人のパレスチナ人がユダヤ人地区とされた場所から追い出されたとのことだった。東エルサレムに住むパレスチナ人の42%は貧困層である。
	バスで移動しながらいくつかの場所を見て回る。ヤコブという名前の入植地は最も大きい入植地の一つで、8万人が住んでいるという。入植地の多くは丘の上にあり、初めは丘の頂上付近にしか街がないが、それをどんどん広げ、下に降りてくる。入植地はどこも同様の雰囲気を醸したしているように見えた。というのは、歴史のないところに本当に「人為的に」街を作るので、新興住宅地のような感じなのだ。建物の材質・形も、建てた時期も同じなのでそう見えるのだろう。バスで走っていると、荒野の中にところどころ入植地がそびえているのは、とても不自然だった。実際は入植地は斜面をだんだん降りていくわけだが、丘に建設された入植地の様子はブリューゲルの『バベルの塔』の絵を私に思い出させた。

	バスで走っている間、ベドウィンの人々や集落(トタンでできたキャンプ)を見かけた。ベドウィンは遊牧民で、パレスチナの中で最も厳しい生活を送っている人たちのグループの一つでもある。イスラエルとパレスチナというゾーニングが厳しくされている中で、彼らはその間で生きるしかない。(なお、ホテルグループはベドウィンのキャンプを訪ねたらしいことを後から知った。)
	私たちがバスで通っていたのはRd.60(60号線)で、ヘブロンからエルサレムを通ってナザレの方まで行く主要なハイウェイの一つだったが、これはイスラエル側のハイウェイなので、パレスチナ人は使えないのだという。道路すらもシェアしたくないほどの分離主義なのだ。
	この日の最後に訪れたのは、全くの荒野の中に警察署だけがぽつんと建てられた丘だった。なぜそこに警察署が建てられているのかといえば、そこに新たな入植地を建てる計画があるからだ。まだ誰も住んでいない場所ですら、先回りして警備するのである。
	一度帰宅。シャワー、休憩。テレビを見ているとスウェーデンが欧州で初めてパレスチナを「独立国家」として認めたというニュース。スウェーデンの外務大臣のインタビューが繰り返し流れていた。パレスチナでこのニュースを知ったことをは非常に感慨深かった。夕食。ルームメイトのロビンは疲れたので夜のプログラムは休むという。他の参加者たちも、自分の体力に合わせて休んだり、カフェでおしゃべりをしたりしていた。
	入植地。山に建設されている。 ブリューゲルのバベルの塔?
	スウェーデンからのニュース。 ちなみにブラウン管テレビ。
Night Program "Kairos Palestine"	この日は"Kairos Palestine-A Moment of Truth"(『カイロス・パレスチナー真実の瞬間』)というドキュメンタリーを見る。キリスト教神学の中でクロノス(時計ではかることができる人間の「時間」)に対し、「神の時間」を指してカイロスと呼ぶ。このドキュメンタリーはイスラエルの支配が神学的に神に反する「罪」であることをパレスチナ人クリスチャンの立場から主張するものだ。このカイロス・パレスチナの運動はエキュメニカル(キリスト教の教派の壁を越えた運動)に行われている。このオリーブツリーキャンペーンのディレクターであるNidal Abuzulufによるレクチャーも続けて行われた。在パレスチナの支援団体のうち45%がキリスト教主義の団体であるという。個人的にこの日のナイトプログラムが興味深かったのは、このカイロス・パレスチナの運動がパレスチナ人による神学や聖書解釈(contextual reading)であり、解放の神学(南米で始まった被抑圧者解放のための神学)の一端を担うものであったからだ。またNidalが聖書には国家としてのイスラエルについては書かれていないと言っていたのが印象的だった。確かに聖書が書かれ

	た時代と現代では「国家」の概念が異なるし、聖書の中で「イスラエル」とは国家というよりも、「神を信じる人々の集まり」を指しているように思う。ましてや、近代国家としての「イスラエル」について聖書は何も言及していない。当然、シオニストたちは「書いてある」と言っているわけであるが、そこに神学的に批判することは私にとっては非常に面白く、重要なことだった。
10月14日（火） オリーブ収穫	ベツレヘムの南西にあるJaba'aという村のMarah Al-Foulという地域での収穫作業。持ち主はKhaled Mashaa'laさん。農地から500mのところに分離壁が作られてしまった。イスラエル兵たちにより、分離壁に近い側での作業はほぼ妨げられ、することができない。2014年にイスラエル当局はこの村の2220㎡を収奪することを決めた。この農家（この地域か?）では2006年には650本のオリーブの木が奪われ、これまで延べ1100本もの木が奪われてしまった。樹齢が60年になる木も多かった（60年という歳月が一瞬にして奪われてしまったのだ!）。オリーブの木は樹齢が高いほどたくさん実をつけ、実の質もよいといわれている。100kgのオリーブの実から平均して25～30kgのオリーブオイルが取れる。収入の激減は明白であるし、精神的ダメージは計り知ることができない。
	この農家のオリーブの木はどの木もたわわに実らせていて、取っても取っても一本の木すらなかなか終わらせられないような状態で、私を含めみんな大はしゃぎだった。しかしそれは同時に農地が奪われたことによって、どれだけたくさんの損失があったのか、ということでもあった。 この日は私は大半の時間を木の上で過ごした。強い日差しの中、木のてっぺんまで登ると顔に風を感じることができ、とても気持ちがよかった。また、スウェーデンから来たオリバーと仲良くなる。彼は14歳で、このプログラム至上最年少。昨年お父さんがプログラムに参加し、今年はお連れ合いとオリバーと三人で参加をしていた。オリバー（Oliver）という名前はオリーブから来ており、みんなにこのプログラムのためにつけられたような名前だね、と言われて可愛がられていた。彼とふざけあいながら作業するのは心の落ち着く楽しい時間だった。この日の収穫量は400kgのオリーブから、130kgのオイルが取れた。（オリーブは種類によって、塩づけなどにして食用するものやオイルにするものの用途が異なる。また種類で実の大きさも異なり、取れるオリーブオイルの量も変わるようだ。） 昼食にお弁当（豆のカレー）をいただき、バスに乗ってこの農家の別の畑を見て回る。
	左：植樹をしたが入れなくなってしまったオリーブ畑。植樹した苗木の筒が見える。 右：この畑の持ち主であるKhaled Mashaa'laさん 
	以前、この農家と協力し、彼の土地にこのプログラムで植樹のキャンペーンも行ったが、そこにはもう入ることはできない。植樹した農地のすぐそばにチェックポイントが作られて

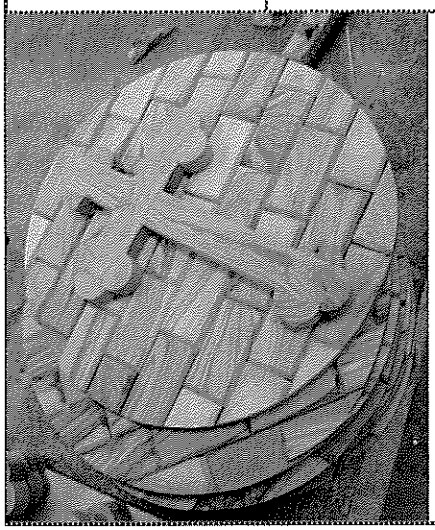
	しまったからだ。このオリーブツリーキャンペーンで植樹した苗木は風などで倒されるのを防ぐため、はじめはプラスチックの筒で覆われている。私たちはもう立ち入ることができないその土地に立っている黄色や白のプラスチックの筒をやるせない気持ちでながめるしかない。
	さらに、もともと彼の土地であったチェックポイントのすぐ下の場所には樹齢の高いオリーブの木が今でも生えているのが見える。7～8年前まではここでも収穫プログラムを行っていたという。当然、今は立ち入ることができないのだが、数年前まではそれらの木々がたくさんの実をつけていたことが確認できたという。しかし今は実がなっていない。先述のようにオリーブの木は手入れをしなくても実がなるはずなのに。理由は、恐らくイスラエル側が薬剤を撒き、実がならないようにしてしまったのだろうということだった。どちらにせよもう入ることができないのに、どうしてそこまでするのか?それは、この土地に対する農家の思いまでも断ち切るためなのだ。イスラエル側は少しでも多くの土地を自分たちの手に入れたいのであり、この農家がここに住んでいても仕方がない、他の場所に移ろうと思わせ、他の農地までも手放すように仕向けているのだ。このような状況があるからこそ、農家のそれぞれの「ストーリー」を聞くこと自体が(残念ながら)意味があるのだということが実感としてわかったときだった。
	Jaba'aからの道でもやはり入植地を見る。西岸地区は6つのブロックに分けられているが、それぞれのブロックに10から12の入植地があり、それぞれの入植地が聖書から名前を取っている。古代の都市を再興しようとしているのだ。この時に見えたのはエフラタという名の入植地。先述のように入植地は徐々にその大きさを広げているが、最終的にはそれぞれの入植地をつなぎ、一つの大きな街として繋ぎたいのだろうということだった。
	また道中、木がたくさん生えている場所とそうでない場所があり、木が生えている場所はイスラエル側の水道が引いてあるのだという。誰も住んでおらず、何もない土地でも、イスラエル側の土地にはインフラの整備が行われている。また、ぶどうと思われる畑があちこちにあったが、イスラエル側の畑にははやり水道が引いてあり、水撒き用の蛇口が見て取れた。パレスチナ側にはない。 ちなみに、この水道の話をしてくれたのは、バスで隣の席に座ったオランダ人のYoopという参加者だ。彼はなんと今回で7度目の参加で、この先も彼がこれまで得てきた知識を色々と教えてくれ、私が参加者たちの中で一番仲良くなったのが彼だった。彼はパレスチナの建物が建設中のものがとても多いことに疑問をもっているようだった。私がウィリアムから聞いた地価の高騰の話などを伝えると非常に納得したようだった。Yoopは初めはそれらの建物が建設途中で放棄されてしまったのかと思っていたが、確かに、7度プログラムに参加するうちに、少しずつ完成に向かっているのが分かったのだそうだ。
Badilでのレクチャー	BADIL Resource Center for Palestinian Residency & Refugee Rights(バディル資料センター)でのパレスチナ難民に関するレクチャー。以下、聞き取れたところだけを記載する。 国際法に基づく「難民」とは、強制的に退去させられた人々のことで、国外だけでなく、国内での移動を余儀なくされた人々も含まれる。パレスチナ人難民はパレスチナ総人口の66%にのぼり、延べ740万人が難民となっている。現在の難民総数は680万人で、そのうち51,900人がパレスチナ内での難民である。これらの数値は世界最大であり、その記録を更新し続けている。

	パレスチナ難民が大規模に生まれたのは大きく分けて3回。1922-1947年の英国委任統治下に15万人がパレスチナ国外へと退去。第二波である1948年のナクバの際は500以上の村が強制退去と破壊にあう(そのうち60%の村は完璧に破壊された)。75万人が西岸地区やガザ地区、またヨルダン、レバノン、シリア、イラクなどに国境を越えて退去させられた。13万人が現在イスラエル領とされている土地に残されており、そのうち4万人は難民である。これらは当時のパレスチナ人口の85%にものぼる。3度目は1967年のナクサ(第三次中東戦争でのアラブ軍敗北による領土喪失)には45万人が強制退去させられた。これらのとき、パレスチナ人たちはシオニストが計画していた通りに移動し、難民となった(シオニストとは聖書おけるイスラエルの別称である「シオンの丘」に由来し、ユダヤ人国家再建を推進する人々のこと)。1897年に第一回シオニスト大会が行われる。彼らは「ユダヤ人」とは民族(ethnicity)であり、宗教ではないとする。なお、ユダヤ人が全員シオニストではないのと同様に、シオニストはユダヤ人だけで構成されているのではなく、クリスチャン・シオニストも大勢いる。特にアメリカの南部バプテスト派には非常に多い。
	シオニズムを推し進めるための障害は3つある。1.元々住んでいる人々。これは民族浄化(村の破壊、主要なエリアでの虐殺、人々を集め、移住させる)によって解決される。2.土地の所有権。これはイスラエル法によって解決される。軍の命令によってある地域を立入禁止にする法を用い、さらに持ち主不在の土地はイスラエル当局が収用することができるという法を使う。つまり、追い出しておきながら、「持ち主がいない」と言って土地を奪うのである。他にもいくつかの土地収奪のための法が存在する。3.領土への入植。土地をパレスチナ人から奪っても、そこに住む人がいなければ「国家」として成立しない。これを解決するために、非宗教的なシオニズムというものと、ユダヤ教徒たちを結びつけた。また、WZO(世界シオニスト機構)やJNF(ユダヤ民族基金)、(ユダヤ人のイスラエルへの)「帰還法」の制定もこの3つめの障害を乗り越える解決策とされている。
	イスラエルの支配体制を継続させるために、イスラエル国家法の制定が制定されている。また、イスラエルにおいて「国籍」と「市民権」は別のものとして存在していることもそれを後押しする。30にも及ぶ法によって、国民であるユダヤ人と、イスラエルの市民権を持つ者(ガ地区ザと西岸地区以外のイスラエル領土内に住むパレスチナ人。48年組とも呼ばれる。なお、ガザと西岸地区に住んでいるパレスチナ人を67年組と呼ぶ)の権利が区別されている。
	では、一体「ユダヤ人」とは誰なのか?ユダヤ社会は母系を取り、ユダヤ人を母として生まれたものが「ユダヤ人」ということになっている。しかしその母はいつユダヤ人になったのか?祖母がユダヤ人ならばよいのか、では曽祖母は?結局イスラエルの場合、そこが問題にされるわけではない。1990年代にはロシア系ユダヤ人が「定員」を埋めるために大量に移民している。
	現在の(イスラエルを含む)パレスチナに住む人々の権利はイスラエルによる「一国家案(One-State Solution)」状態になっている。ユダヤ人国民をピラミッドの頂上に置き、次に(国内難民を含む)イスラエル市民権を持つパレスチナ人、エルサレム居住者、西岸地区ID保持者(西岸地区に住む難民を含む)、ガザ地区ID保持者(ガザ地区に住む難民を含む)、境界及び緩衝地帯(ガザ地区の境界からイスラエル側に3.5kmの地帯)のID保持者、国外への難民である。
	ナクバは1948年に終わったのではなく、現在も進行中である。ある地区では、分離壁の中に家があり、壁の外に畑を持つパレスチナ人がいる。彼らは自分の畑に行くために毎回チェックポイントを通り、許可を得なければならない。大きな虐殺ではなくても、静かに

	以下のような方法で強制的な人口移動はなされている。(1)イスラエル市民権を持つパレスチナ人に対する差別的なイスラエル法(2)居住権の問題。パレスチナ人の子どもは自動的に居住権を親から引き継げるわけではない。(3)分離壁、チェックポイントでの許可を必要とする支配体制による、移動の自由の制限。(4)制限的な区分・計画政策(家屋破壊と土地没収を含む)(5)非合法な入植地と、罪に問われない入植者たちの暴力と嫌がらせ行為(6)帰還の拒否(7)天然資源の支配(8)組織的拘束、軍事作戦、イスラエル刑務所での拷問などを用い、あらゆる形のレジスタンスを抑圧(9)WZOやJNF等の準国営機関と、それらの役割、影響。
	国際法では、占領地下における攻撃はテロではなく抵抗運動(レジスタンス)として認められる。当然民間／非戦闘地域におけるそれはテロとなる。パレスチナは完全なる占領下にあり、パレスチナ人が行っているのは正当なレジスタンスである。
	「帰還の権利」について。帰還の権利とは、「権利を持つための権利」である。帰還の権利は慣習法、国家法、人道法、人権法の中にしっかりと位置付けられている。帰還の権利は個人や特定のグループの保護のためにその政府によって制限されない。またそれは他の国家によって破壊や暴力にさらされる時、国家の境界を越えて適用される。帰還の権利を守ることは、強制追放、特に大規模に行われる時、またそれ以上に(人種や他のアイデンティティに基づく)差別的に利用される時には、国家に対し高度に義務として求められる。パレスチナ人にはこれらが認められねばならない。重要なのは国際社会の働きである。
	帰宅し、休憩。Robynはこの時間にポーチやバルコニーでパレスチナ・ビールを飲むことが日課になっていた。なお、彼女も初めは「外国人価格」でビールを買ったが、Nellyにそれは高い!と言われ、それをこの家の向かいの商店の店主に伝えると、その後パレスチナ人価格で売ってもらえるようになったようだった。バルコニーはナルギーラ(水タバコ)がおいてあったのを発見。滞在中にやらせてくれと頼めばよかったと後悔!ポーチの階下では、水道の使える日だったのだろう、イブラヒムが家の壁を洗ったり植木に水をやっていた。その横で私はZaidとYazenと鬼ごっこをする。日中のレクチャーを聞いて英語で頭がオーバーヒート状態だったのでリフレッシュ。二人とも仲良くなってくれてとても嬉しい。庭にはレモンやオレンジの柑橘類の木(実が熟すまではもうちょっとかかるようで残念)や、プルメリアが植えられていた。
	夕暮れのバルコニーでWilliamと話す。毎日、今日はどうだった?と聞いてくれるのだが、私はパレスチナに来てからずっと感じていたことをこの日は話した。実は少し落ち込んでいる。イスラエルとパレスチナのことを知れば知るほど、日本とイスラエルがあまりにも似ていてつらいのだ。例えば、日本には在日朝鮮人と呼ばれる人々がおり、彼らは元々第二次世界大戦中、朝鮮半島を日本が占領しており、そのために日本に強制的に連れてこられた。戦争が終わっても、一族で日本に渡ったために朝鮮半島に帰るあてが無く、日本にやむなく残った人たち。日本は朝鮮半島を「日本」の一部にし無理矢理連れてきたのに、日本に残らざるを得ない人々を「二級市民」扱いしている。税金は取るくせに選挙権はなく、社会の中での差別も非常に強い。自分は「日本人」であり、彼らにとって抑圧者の一人だ。他にも数え切れないほど日本とイスラエルがシンクロしていて、抑圧者としての自分を突きつけられ、何もできない自分に憤りを感じ、つらいと話した。Williamはきっと、あまりにも意気消沈している私を励ましそうとしたのだろう、"You can't change"変えられないんだ、と言った。今日は悲しいけど、明日には忘れよう、とも。私はショックだった。このときはすぐに自分がなぜ自分がショックを受けているのか分から

	なかった。彼に自分の言葉が伝わらなかったから?そうではなく、彼に"You can't chenge"と言わせてしまった自分自身にショックを受けているのだ、と後から気づいた。誰よりも、パレスチナの現状が変わってほしいと願っているのは、パレスチナ人である彼であるはずなのだ。その彼に、変わらない、という言葉を言わせてしまったのだ。
	また別な時に(手帳を時系列でつけられなかったので前後関係がわからなくなってしまったが)、パレスチナとイスラエルのことを話してくれたことがあった。パレスチナでは、なんでもイスラエルを通さないと手に入らない。お金も、イスラエルを通してしか自分たちのところに来ない。問題はその70%が彼らのポケットに入ってしまうことだ、と。パレスチナ当局の立場もわからないではないが、もっと頑張ってほしいとも言っていた。そしてさらに、自分が住む地域についても話してくれた。ベイ・サフール、ベツレヘム、ベイ・ジャラは他のパレスチナの地域と比べて静かな地域だ。自分たちは争いたくないから口を噤つぐでいるんだよ、と。Williamはそのことに対して肯定的に話しているように見えた。イスラエルに対する怒りについて話しながら、しかし静かなベイ・サフールを誇りに思っている。その複雑さに、私は胸を締め付けられるようだった。変えられない、ということも、口をつぐむということも、彼がパレスチナで生きるために、身につけざるを得なかったことなのではないかと思う。そのことを彼が意識的に選択したかどうかはわからないが、生き延びるための手段として、選ばざるを得なかったのではないかと思うのだ。そして、そのような生き方を敷いているのは私自身であるということに、悔しさ、やるせなさと、自分自身に対する怒りを感じた。
Night Program イスラエル人活動家のレクチャー	夕食後(チキンロースト。スパイスが絶妙)、Williamに送ってもらいプログラムへ移動。夜はこの日のみ、YMCAではなくAIC cafe(インターナショナルなバー兼パレスチナ支援のイベント会場になっているカフェ)で行われた。先に着いたメンバーたちはお酒を飲んだり、カフェで扱っている支援グッズを見ていた。私もお土産&自分用にTシャツを2枚購入した。 この夜のプログラムは当初の予定と変更され、特別ゲストとしてヤニーフというイスラエル人のパレスチナ支援活動家の話を聞いた。30代半ばぐらいの、普通のお兄ちゃんといった感じで、私たちが拍手で迎えると、頼むからやめてくれ、俺、何もしてないし、そういうの苦手なんだよね、と言っていた。彼は元々は(それこそ)「普通の」イスラエル人で、何も知らなかったし、何も考えていなかったという。イスラエルは徴兵制を敷いており、男子は3年、女子は1年半の兵役がある。彼も18〜21歳の時に兵役に就いた。本当にちゃらんぽらんな若者で、戦車に乗っていてもゲームみたいだとしか思わなかったという。兵役中の部署は色々あるが、チェックポイントで警備をしているのも兵役中のイスラエル人。人によってはずっとチェックポイントで過ごすのだが、基本的にはその仕事自体の「意味」を教えられることはないし、上官が言う通りにするだけ。でも、通過できる人はこの人、この人はだめ、とやっているとなんだか責任のある仕事を果たしているような気になり、自分の愛する人たちのために働いているんだ、というような気分になる人もいる。 自分は2つの部署から行く場所を選ぶことができたが、一方はレバノンに近い方での任務で、なんだかそっちの方が命の危険がありそうで怖かったので別な方にした。自分は兵役中、ずっとふさぎ込んで、なんだか気分が晴れなかった。そして兵役中に怪我をし、一度軍隊を離れることになった。怪我が治ってから本当は軍隊へ戻らなければならなかったが、それを先延ばしにして幾つかの国を旅行して回った。そのあたりから、「イスラエル」という国家のあり方についておかしいと考え始めるようになった。

	兵役の残り期間をどうするか非常に悩んだが、10年かかって決めたのは、軍には戻らず、軍刑務所に同期間入ることだった。軍刑務所はいつもいっぱいだったが、それは政治的な理由で入っているというよりも、単にイスラエル軍に合わない人たちだった。というのはロシアやエチオピア出身の人たちで、文化自体が違うからだ。本当に自分は何も知らなかった。イスラエルの学校ではグリーンライン(第一次及び第三次中東戦争の停戦ライン。パレスチナは「国家」として認められていないが、イスラエルとパレスチナの事実
	上の「国境」)が何かとか、1948年は何の年かなど、何も教えない。大人たちも知らないのだ。自分がいかに何も知らなかったって、「シオニスト」という言葉も知らなかったのだ。今は旅行中に知り合った友人たちとパレスチナ支援のために活動している。普段はイスラエルのツアーガイドをしているが、こういうことをしているので、ライセンスがそのうち剥奪されるかもしれない。
	質疑応答では、ガザに送られたイスラエル兵たちの自殺率が高いことや、イスラエルの子どもたちへの教育を変えることができるかということなどが聞かれた。教育について、インターネットなどのプラットホームはあるが、正直かなり難しいと思う、ということだった。みんなトラブルメイカーにはなりたくないし、自分のことを考えているだけなのだ。自分が今すぐ言えることがあるとすれば、学校に行かない、ということがまず必要、ということだった。
10月15日(水) 自由行動日	5日目、プログラムの中日であるこの日は夜のプログラムまでは自由行動日。私は東エルサレムYMCAを訪ねる予定でいたのだが、むしろ主事であるアンドレさんたちが昼頃ベイ・サフールまで来てくれるということだったので、午前中はのんびり過ごすことにした。なお、他のメンバーは自分たちで好きなところへ行くこともできるし、ATGがアレンジしてくれたツアーでジェリコやナブルスに行く人たちもいた。
	ステイさせてもらったHannouneh家は、ずっとベイ・サフールで暮らしてきたという。Williamはオリーブの木工細工を仕事としていて、今はそれを長男のAnanに譲っている。ベイ・サフールでは50%の人が観光産業で生計を立てているという。この家には1階の奥に工房があり、そこで木工作業をしている。作っているのは十字架の形の壁飾りや、飾り時計の枠など。これらは主にアメリカでクリスマスプレゼント用に販売されるとのこと。WilliamとNellyはそれぞれきょうだいの大半がアメリカ(主にアリゾナ)で暮らしており、そのきょうだいたちを通してアメリカで売っているようだった。Nellyは半年後にきょうだいのところに遊びに行く予定だということ。しかしそれは外国人である私のように簡単ではない。ヨルダン経由で2日から3日かけていかなければならない。

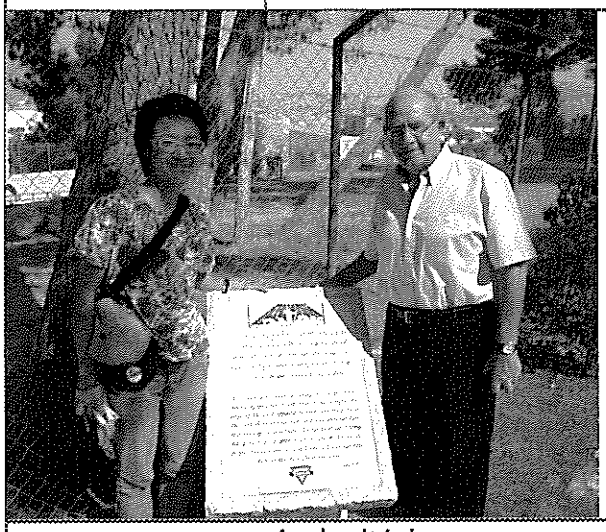


左:アナンの木工細工
ベツレヘム旧市街
にもたくさんオリーブ
木工の工房がある

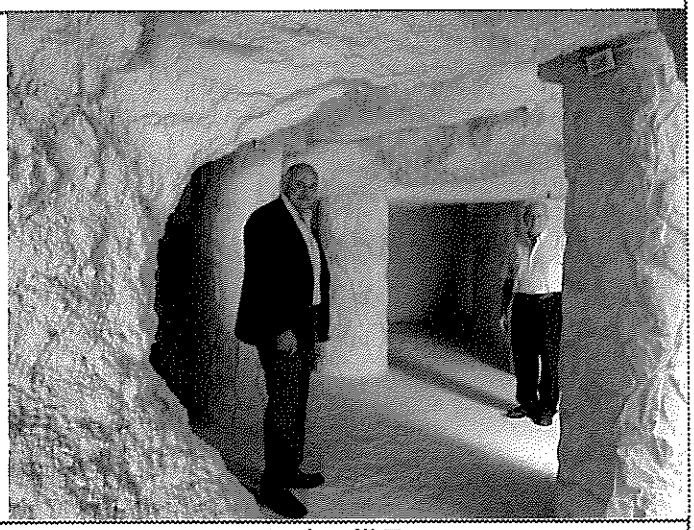
右:バルコニーでくつろぐ
ロビン。おしゃべりで
楽しいおばちゃん

	午前中、洗濯をさせてもらう。期間中1回で済んだ。その後、NellyとWilliamと出かける。まず、ベイ・サフール内にある、パレスチナに帰国中のWilliamの兄の家に寄る。庭が小さな果樹園になっており、いちじくの実をもいでそのまま食べさせてくれた。ものすごく味が濃くておいしい。またその家の向かいにあるナルギーラ屋さんにも連れて行ってくれた。シリアやエジプトで作られた水タバコが並ぶ。買うなら店主に安くするように言うからね、とWilliam。これもやはり買ってくればよかった!と後から後悔。Williamのきょうだいたちを乗せ、入院中である彼らのおじさんを見舞う。外国で病院に入るのはなかなか
	ないので、貴重な機会だった。大きい総合病院。パレスチナでは貧しいひとたちは治療費なしで診てもらえるとWilliamから聞く。
東エルサレム／ベイ・サフールYMCA	病院からの帰りにJAlのオフィスで降ろしてもらう。プログラムコーディネーターのNidalが迎えてくれる。Andreさんたちは遅れているので少し待ってほしいというので、Nidalと話しながら待つ。前日にWilliamにしたのと同じことを彼にも伝えてみた。彼はまず、日本は良い国だと思っていた、と言っていた。でも残念ながら人種差別はどこの国にもある、とも。私は自分の言いたいことの伝わらなさに、やはりもやもやしていた。しかし帰ってきてから思うのは、彼(ら)がどれだけ私に心を開いて話してくれたか、ということだ。Nidalはこのプログラムのリーダーであり、その立場から話すことはいくらでもあるだろう。しかし、彼個人が心の奥底で思っていることー私を含めた「国際社会」に対するもどかしさや怒りーを、話してくれたわけではないだろう、と。私は彼を非難したいわけではない。話さなくて当然だと思う。ほんの一時パレスチナを訪ねるだけの私に、パレスチナで生き続ける彼(ら)との距離がちょっとやそっとで埋まるわけはない。そんなことを期待するのは傲慢でしかないのだ。
	しばらくしてAndreさん、Nadarさん、Micherさんが到着。日本YMCAからの献金をお渡しし、ベイ・サフールYMCAに移動して案内してもらいながら、東エルサレムYMCAの活動について伺う。始めに案内してもらったのはベイ・サフールYMCA内にある洞窟。「ベイ・サフール」というのは「羊飼いの丘」という意味で、イエスが生まれた時に天使が羊飼いにその誕生を告げたとされる場所。だからこそ、クリスチャンにとって羊飼いたちが暮らしたであろう洞窟はとても意義深い場所なのである。ベイ・サフールには3つ大きな洞窟があり、それを(ローマ)カトリック、正教、ベイ・サフールYMCAがそれぞれ所有・管理している。YMCAの洞窟はエキュメニカルに利用され、誰に対してもオープンになっている。柱を立てる以外は自然のままにしてある洞窟で、とても静かで落ち着く雰囲気のため、瞑想にぴったり。時にはムスリムの人がやってくることもあり、"more than ecumenical"(通常、エキュメニカルとはキリスト教の教派を超えた運動のことで、宗教すらも超えてこの場所が用いられているんだ、ということ)だと言っていた。毎年12月24日にはこの場所で祈祷会をするのだそうだ。それが終わると、それぞれの教会に移っていくとのこと。また洞窟の入口にはかまどがあり、祈祷会の前に火を入れて食材をいれ、余熱で調理した料理をみなに振る舞うということも聞いた。
	ベイ・サフールYMCAには野外ステージやドミトリーもある。ドイツとパレスチナのユース・キャンプを行っていて、毎年ドイツとパレスチナと交互で開催しているとのこと。日本のユースともぜひ行いたいと言っていた。ドミトリーは3人部屋が10部屋あり、最大35人宿泊が可能。シンプルだが居心地がよさそうだった。もう少し部屋を増やしたいとのこと。東エルサレムYMCAの活動は大きく二つに分けることができる。一つはYMCAの伝統的な活動で、スポーツなどを通したコミュニティとしての働きである。YMCAはコミュニティの＜ために＞活動しているのではなく、コミュニティと＜共に＞活動している。特にパレスチナでは若者たちが平和／穏やかな生活を失っており、だからこそコミュニティ・セン

ターとしての役割が重要だとのことだった。ベイ・サフールYMCAの目玉の一つは屋内プールである。4レーンある大きなもの。更衣室も非常に綺麗で、サウナまで完備されている。水の少ないパレスチナでプールを管理するのは非常に大変で、使用しないときは蓋をしておりたり、様々な工夫をしている。利用料はどうしても少し高くなってしまうが、仕事後、夜間に泳ぎに来る人もおり、いつも混んでいるという。サービス提供のためにファンドレイジングも行っている。更衣室の横にはカフェテリアやマッサージチェア、卓球台やサッカーゲームなどの遊具もあり、いつでもくつろげるようになっている。他にもトレーニングジムやダンススタジオもある。外には滑り台やブランコがある公園もあり、週末は子どもを連れた家族でいっぱいで、ここで誕生会やバーベキューをする人たちもいるとのこと。パレスチナには健全で安全な場所が必要とされている。



Andreさんと

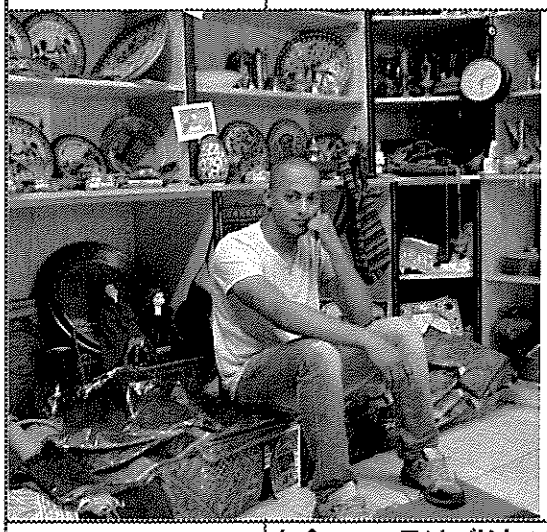


洞窟の様子

ベイ・サフールYMCAのもう一つ大きな働きは、イスラエル兵に拘束された子どもたちやユースのリハビリプログラムである。1987年の第一次インティファーダの際、負傷した者の67%は子どもと若者。現在でも12～17歳のユースが年間700人イスラエルに拘束されおり、そのサポートは必要不可欠である。例えば、イスラエル側に拘留された子どもは、(4～5ヶ月の期間)学校を休んでいたため、自分より年少のクラスに入れられることが多い。しかしそれでは学校に行くのをやめてしまう生徒が多いため、元のクラスに戻れるようにサポートをしている。あるいはイスラエル兵によって負傷させられた子どもたちの中には障がいを負う子もいる。YMCAでは家族と協力しながら、家の改築について支援したり、どうすればよりスムーズに生活できるか相談に乗っている。

最も重要なのは精神面のサポートである。子どもたちは体は元気でもトラウマを抱えており、心理社会的ケアを行っている。EMDR(eye movement desensitization and reprocessing)という心理療法を行っており、ベイ・サフールYMCAにはその専門家がいる。彼女はアラブ地域で唯一、トレイナー養成ができるレベルであり、イラク、シリアの他にもチェチェンやコソボの紛争、スリランカでの地震での支援を行い、ドミニカなどに赴くこともあるとのこと。ここでガザ地区でのサポートはどうか尋ねたが、ガザとは現在ほとんど通信自体が不能であるとのこと。過去にスタッフを一人送ったが、そのスタッフ自身がトラウマを受けるほどの状況である。現在はガザから西岸地区の病院に来たちとたちのカウンセリングを行っているとのこと。

もう一つのケアプログラムは若者の就労支援である。ベイ・サフールYMCAの就労支援センターは国家レベルで見て唯一であるとのこと。様々な機器を用いながら、身体能力の適性や集中力の持続からどのようなことに興味があるのかなどをチェックし、より適性

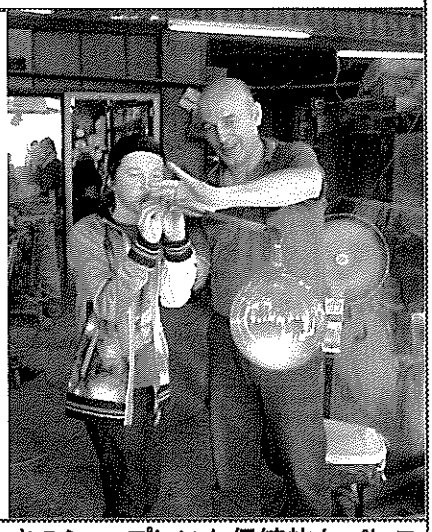
	の高い仕事を見極めることができる。
	Andreさんは、もっともっとこのYMCAを発展させたいと言っていた。世界中からの献金に支えられている。お金ができたらここ、次はここと(お金を宙に浮かせることなく)どんどん活用しているとのことだった。私が、もちろん元々パレスチナのYMCAを支援することは喜んでやっていたが、実際に来てみたらここを支援することは私自身が嬉しくなることだと思ったと伝えると、Andreさんは嬉しそうに、ここに来てくれた人はみんなそう言いますよ、と言っていた。
	3時頃YMCAをお暇し、ベツレヘム旧市街の観光に出かける。生誕教会からほど近い小さなレストランで遅い昼食。フムスとピタパン、サラダ。一人で店番をしている26歳のマハムッドと少しおしゃべり。(かなり直接的に)ナンパをされて困る。なんでこんなこと(セクハラ)ばっかり「世界共通」なの・・・とげんなり。(注:本当に「世界共通」。アラブの国の場合・・・というような結論には私は至りません。)
	お土産を少し買うためにぶらぶらしようと思うが、レストランの斜向かいの民芸品店でかなりの時間を使うことに。店番をしていたのは20歳のアリ。おばさんの店をお兄さんと手伝っているという。お兄さんは大学生だが、大学が遠くその間のチェクポイントを通るのにかなり時間がかかること、またお金もたくさんかかるので今はやむなく休学しているとのこと。自分も本当は勉強したいと言っていた。お土産を物色しながら話しているとお兄さんも帰ってくる。パレスチナの伝統的な刺繍のされたクッションカバーやストールを何本か買い求めようとしたが、あれもどうか、これもどうか、と勧められ、結局かなり長い時間押し問答をした末に根負けしてラグも買うことに。必死に、きみには特別にパレスチナ人価格で売ってあげるから!と、かなりディスカウントしてもらったが。たくさんしゃべって友達になれたし、よい思い出。しかもこの後アリがミルク・グロット教会(生誕教会のすぐ横にある教会。マリアの母乳で岩が白くなったという伝説がある)を案内してくれた。その後アリたちの店に荷物を預け、一人で旧市街を探検。収穫作業の時にズボンを1本破いてしまったので、途中でGパンを買う。茹でたトウモロコシのスタンドが流行っているようであちこちで見かけたので、1つ買って食べ歩き。ちょっと迷子になりそうになりつつもアリの店に戻ると、お兄さんがベイ・サフールまで送ってくれるというのでありがたくお願いした。途中の交差点で偶然Yoopを見かけたので、一緒に乗せてもらう(ステイ先がとても近かった)。
	左:アリ。仲良くしてくれてシュクラン! 右:Nelly特製ワラド。今すぐ食べたい。ザッキー!!
	夕食。この日はブドウの葉でお米を巻いたワラド(という名前に聞こえる)パレスチナの伝統料理。ズッキーニにも詰め物がしてある。Nellyは本当に料理上手で、毎日夕食が楽しみだった。この日の夜はSam Bahourの講演だったが、あまりにも疲れていたので断

	念。この辺りから英語で脳みそが常にオーバーヒート状態だった。
10月16日(木) ヘブロン フィールドワーク	この日は1日ヘブロンでのフィールドワーク。ちなみに、私とロビンは毎日イブラヒムと一緒に車で集合場所であるATGに行っていたが、途中ZaidとYazenを学校に送り届けていた。パレスチナの学校は幼稚園から高校まで一貫のようだった(少なくても彼らが入っていた学校はそうだった)。Zaidは小学校で英語もならっているので、ほんの少しだけ話すことができた。毎朝どっちが車の窓際に座るかで小競り合いをしていて微笑ましい。なお、彼らとのやり取りなどで私が覚えたアラビア語。1.ヤッラ:let's goやcome on!の意味。滞在中、一番耳にしたり私自身も使ったのがこれ。2.シュクラン。ありがとう。3.バビービ:my loveの意。恋人同士だけでなく、子どもたちにみんながよく使っていた。4.ラ:No。ナンパを断るのもこれ。5.ザッキー:おいしい。6.マルハバ:こんにちは。10日間で習得できたのはたった6つだった・・・。
	この日のコンダクターは再びイワッド。1時間弱のドライブの間にも説明をしてくれる。パレスチナ(西岸地区)はオスロ以降、エリアA・B・Cの3つのゾーンに分けられている。簡単に言うと、エリアAはパレスチナ人のみの場所、エリアBはパレスチナとイスラエルのミックス、エリアCはイスラエル占領下で、パレスチナの60～66%がこのエリアCに当たる(「パレスチナ自治区」と言われている西岸地区の6割以上が実はイスラエル占領下にあるのだ!)。原則的にはエリアAが市街地であり、郊外に行くに従ってB→Cとエリアが変わる。エリアが変わる境目には、道路の脇に60～70cm四方のコンクリートのキューブが置いてあり、それが目印になるが(そのことを教えてもらわなければが分からないくらい、エリアの境はあちこちにある)、これは何か起こった際に道路上に置き、エリア間の移動を妨害するためにあるのだという。エリアCではパレスチナ人がイスラエル法に反して家などを作ればすぐに破壊されてしまう。本来、エリアCへの無許可の建設は入植者にも禁止されているのだが、実際は見て見ぬ振りがされていて、そこから小さな入植地が始まることもある。
	途中入植地の入口の横を通過したが、当然そこにはゲートがあり、(入植者以外の)出入りを厳しく取り締まっている。一方で難民キャンプの横も通り、こちらにもゲートがあるのだが、キャンプの周囲がフェンスで囲まれており、オープンエアの監獄なのだ、と言っていた。なお、パレスチナ人と入植者では車のナンバーの色が異なり、それで監視されている(沖縄で米軍の持つ車のナンバーが違うことが思い出された)。
	また道の途中に巨大な(3mはあるか?)赤い標識が設置されている場所がある。これはエリアAへの入口に建てられているのだが、立てているのはイスラエル当局である。内容はこうだ。「この道はここから先エリアAとなり、パレスチナ当局下にある。イスラエル市民が立ち入ることはイスラエル法によって禁止されており、(立ち入ることは)あなたの生命に危険が伴う」。ヘブライ語と英語、ご丁寧にアラビア語でも書いてある。イスラエルがパレスチナ人をテロリストとして考えていることは明白である。なお、ここでいう「イスラエル市民」は以前は48年組をも含んでいたが、現在は入植者のみを指す。
	ヘブロンに到着し、最初にNatsheh Familyというセラミックとフェニキアン・ガラスの工房を訪ねる。パレスチナでは、以前は生活必需品ですらイスラエル側のものしか手に入れることができなかった。しかし、現在は一部の産業が復興し、この工房のように産業が復興し、パレスチナの製品も買えるようになったのだという。ガラス吹きやセラミックの絵付けを体験させてもらっている参加者もいた。併設されたショップでショッピング。
	次に訪れたのはHirbawi textile factoryというカフィーヤ工場。カフィーヤとはアラブの伝統的なスカーフで、アラファトが頭に被っている白と黒の布のこと。この工場の玄関には巨大なアラファトの写真が貼ってあった。ここはパレスチナで唯一のカフィーヤ工場と

のこと。20台近い織り機が稼働していたのだが、なんとスズキ製だった。職人がとても性能がいいと言ってくれたが、エルサレムでスズキのショールームを見かけていたので複雑な気分。

左：エリアAに入るところに立てられている恐ろしく差別的な看板。こんなものが目につく日常を生きるとは一体どんな思いか

右：ガラス工房でのオリバー



バスの中でイワッドが、参加者たちに質問をした。さっきのショップにいた伝統的なパレスチナの衣装に身を包んだ男性を見たか、彼の目の色を覚えている人がいるか、と。というのは、ヘブロンはパレスチナ人だがブロンドであったり、目の色が淡い人たちがいるという。なぜかというと、中世に十字軍として西ヨーロッパから来た人たちの中に、ヘブロンに残った人たちがたくさんいて、その子孫なのだという。イワッドによれば、彼は自分がそのような見た目であるからこそ、民族衣装を着ているのだ、と言っていた。

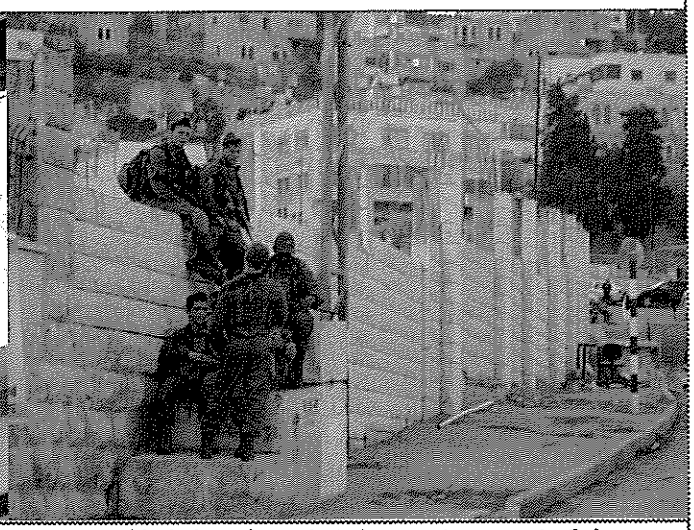
ヘブロンの街へ。ヘブロンは他のパレスチナの街と決定的に違うところがある。それは、通常パレスチナがエリアABCに分けられ、パレスチナ人と入植者のコミュニティは完全に分けられているが、ヘブロンはパレスチナ人コミュニティの＜中に＞入植地が作られ、互いに重なり合っている。よって、ヘブロンではエリアABCではなく、パレスチナが管理するH1とイスラエル管理下のH2とにゾーンが分けられている。ヘブロンは非常に古い歴史を持つ街で、かなり栄えていた。旧市街はかつて1600もの店が軒を連ねていたが、そこがH2に指定されて入植地ができ、今はゴーストタウンになってしまっている。H2内のイスラエルコミュニティにあまりにも近い店は、イスラエル当局によって閉じられ、鍵が溶接までされている。現在H1とH2となっているところは元々車で1～2分の距離であったが、双方をつなぐ短い道路は現在は封鎖されてしまっている。その間に入植地があるからだ。それでもH2で細々と商売を続けている人たちがいるのだが、市場の通りは非常に狭い。なぜなら、店自体は鉄扉が取り付けられて中に入ることができないので、元々自分お店だった場所の前に品物を並べているからだ。さらに、通りは金網やブルーシートで「屋根」が付けられている。これは雨よけのアーケードではない。彼らの店（が元々あった建物）の二階が、もはや入植地となってしまっているのであり、入植者たちがゴミや汚水を窓から捨てるからなのだ。ヘブロンはそれぐらい混沌として暴力的な街なのである。

H2（もしくはヘブロンか?）において、家屋の新築や修復はヘブロン当局に届け出なければならない。しかしパレスチナ人は届け出ても許可されず、一方で入植者が勝手に増改築をしてもやはり壊されずに放置されるのだ。このような混在状態になったきっかけは、入植者家族がとある用で1週間だけと断って入り込み、そのまま住み着いてしまったという事件だという。

しばらくスークを歩くと、だんだん賑やかになってくる。H1に入ったからだ。しかしある場所で道がY字になっているのだが、合流している3つの道のうち1つはH2なのだという。そして、そのH2エリア内に今でもなんとか住み続けているパレスチナ人たちがいる。しかし彼らは自分の家とH1を行き来するたびに(つまり仕事や学校、買い物など外に出るたびに)毎回ボディチェックを受けなければならないのだ。住民しか入ることはできず、

車で通ることもできないため、例えば冷蔵庫などの大きなものは買うことができないし、修理工も呼ぶことができない。救急車や救急隊員すら入ることはできないため、H2内で倒れたら自力でどうにかするしかない。また、家の中には家族の中の誰かしら必ずいなければならないという。1時間でも無人にすれば、奪われてしまうのだ!完全な民族浄化だ、とイワッド。

H2の「屋根」になっている金網。ごみだらけ

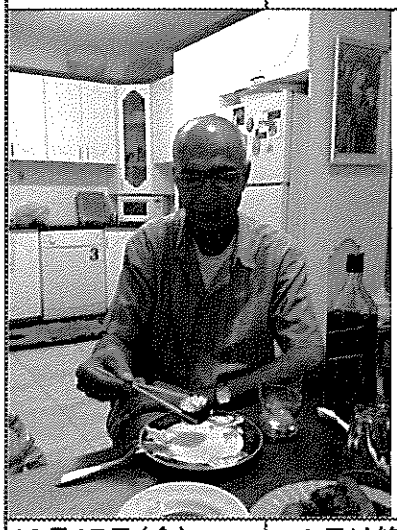
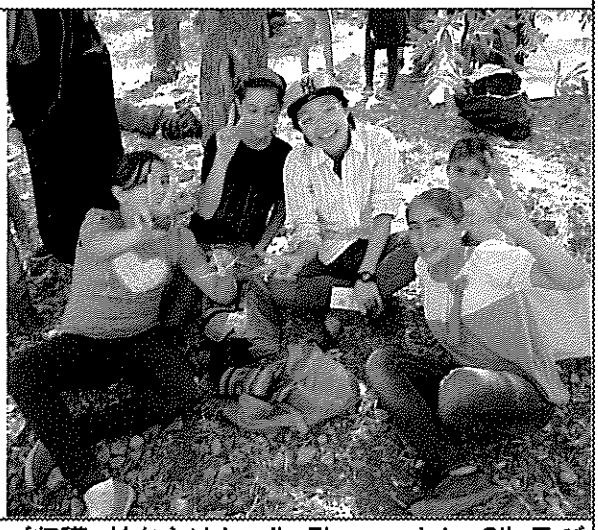


入植地内、ゴーストタウンのイスラエル兵士

私たち参加者は、ボランティアスタッフと一緒にそのチェックポントを通って、H2内へと入った。イワッドとイブラヒムはパレスチナ人であるため、反対側のゲートで待っているという。外国人旅行者である私たちは、(空港にある)金属探知機を通るが音がなっても特に亜チェックされることもなく素通りだった。

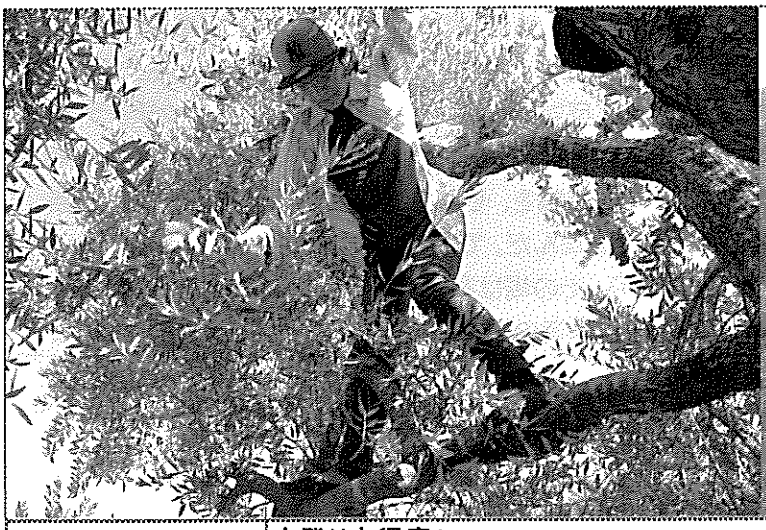
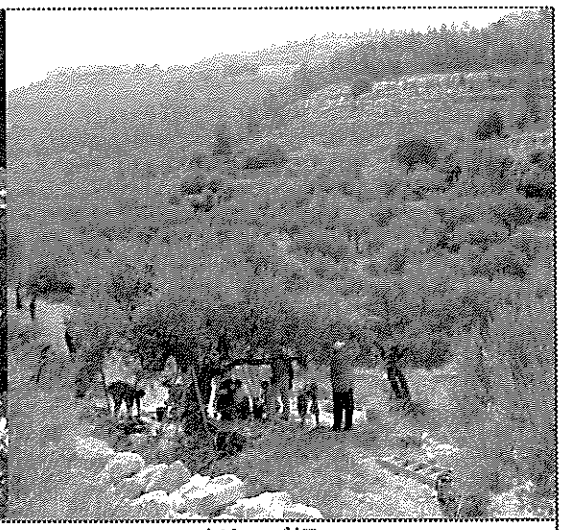
H2の中はまさしくゴーストタウンだった。仮庵祭期間中のためかいつもより入植者も少ないという。ほぼ無人の街に、「ユダヤ人のルーツ」「ユダヤ人がアクセスできるのはヘブロンのわずか3%です」「我々のVIPパートナーであるアメリカからのみなさんを歓迎します!」などといった看板とイスラエル兵士たちだけが目につく。みな言葉を失いながら反対側のゲートへ。パレスチナ人の民芸品店お宅で昼食を取る。民芸品店でお茶を飲みながらしばし休憩。一人ものすごく英語が堪能な8歳ぐらいの男の子がいて、参加者たちと色々とおしゃべりをする。その間も彼よりもっと小さい子どもたちがキーホルダーやブレスレットを売りに来る。子どもたちにラ(No)というのはツラい。

午後はイブラヒム・モスクへ。モスクへ入るためにチェックを受けなければならない。またモスク内では女性はローブを借り、頭からすっぽり覆って肌を隠す必要がある。イブラヒム・モスクは(名前の通り)アブラハムとサラを真ん中に、一方にイサクとリベカ、他方にヤコブとレアが埋葬されていると言われている。このモスクは1967年にその内部を分割され、一部がユダヤ教のシナゴーグとなっている。当然、建物内での行き来はできず、別な入口を用いる。イスラエル側はこの聖地でどうしてもヤコブ側を取りたかった。聖書ではヤコブがのちに「イスラエル」と呼ばれるようになるからだ。モスク内の装飾は素晴らしかった。

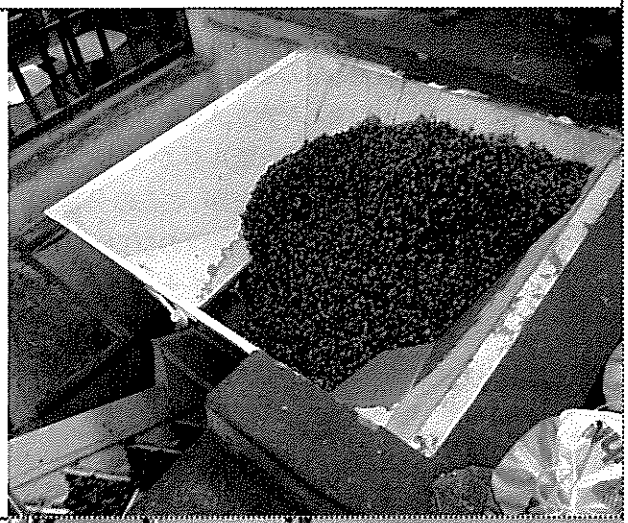
	帰宅。この日は夜のプログラムがお休みだったため、日本から持ち込んだ米とちらし寿司の素、海苔で太巻きを作る。反応は・・・イマイチ(笑)。Nellyのみ、アメリカのきょうだいのところでsushiを食べたが、それよりずっとおいしいと言って食べてくれた。ロビンにも概ね好評。(わざわざ軟水を探してお米を炊いたし、自分としては材料が揃わない中で悪くないできだったのだが・・・。ま、口に合わなかったということで。)割り箸も持って行ったのだが、箸を使ってる自分の写真を撮って!というWilliamが可愛らしかった。ロビンは夕食後、昨年このプログラムに部分参加したときにステイした家族に会いに出かける。しばらくテレビを見たりしながらのんびりしていると、RuwanやAnanなどみんなが集まってきた。子どもたちも含めてみんな勢ぞろいして何事かと思っていると、この日はWilliamとNellyの結婚記念日で、サプライズでお祝いだった。私も「サプライズ」してしまい、せっかく全員いたのに写真を撮らなかったことを心底後悔している。なお、この後もいわゆる記念撮影的にみんなと写真を撮ることができなかった・・・。大失敗!
	左:お箸を使うウィリアム 右:子どもたちと。 ツルや風船を 一緒に作った。 
10月17日(金) オリーブ収穫(終日)	この日は終日ベイ・ジャラの畑でオリーブ収穫。持ち主はJamila Elayyanさん。Gilo及びHar Gilo入植地からそれぞれ500mの位置。ベイ・ジャラ-エルサレムチェックポイントも400mの近さにあり、100m先を60号線が通っている。 かなり広い畑で、地元の人々と一緒にかなり大勢で収穫を行った。唯一、ホテルグループとも一緒に作業した日でもある。いつものようにおしゃべりをしながら収穫。地元の人たちは作業中、ずっとアラビア語の歌を大合唱していて、それを聞きながら作業をするのも素晴らしい雰囲気だった(唯一聞き取れたのはハビービ。こっちはもちろん恋愛の歌)。また、子どもたちも大勢来ていて、オリバーと遊べるかと思い持って行った折り紙とけん玉が大活躍。ベタにツルを折ったりして一躍人気者に。けん玉もやらせてやらせて!と取り合いになるぐらいだった。みんなとっても可愛い。木の下での昼食をはさみ、午後も引き続き収穫。スペイン人のマリアと話していたことだが、ブルーシートの外に落ちてしまったオリーブの実を拾って集める(かなり大変な作業!)は女性たちの仕事のようで、こういうところ、どうしても好きになれない、と言い合っていた。この日に取れたのは合計で1200kg、オリーブオイル200kgとなった。 なお、この日の午後、参加者の一部は毎週金曜日に行われている反イスラエル・デモに参加。私は行かなかったので詳細は省くが、特にイスラエル兵士と揉め事は起きなかったが、非常に威圧的なことに変わりはなく、壁でもチェックポイントでもないところで、ここから先は入ってはいけない、などと言われたそうだ。

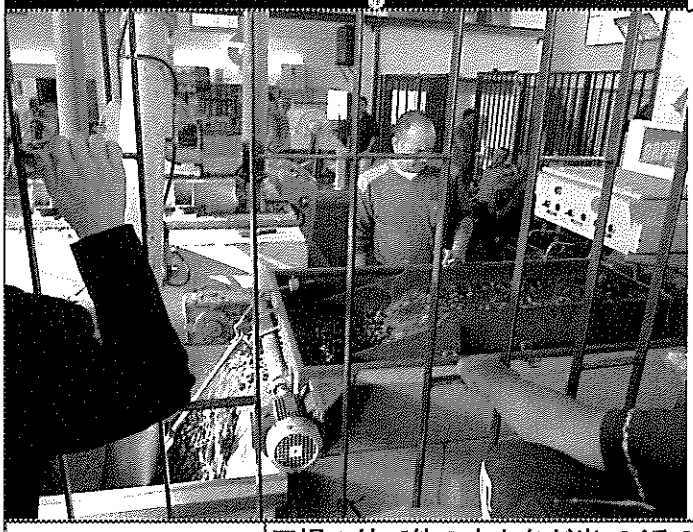
Night Program BDS(ボイコット運動)	帰宅、シャワー、休憩、夕食。この日はスパイシーなおかゆ。レモンをたっぷり絞って食べる。フライドオニオンがアクセントになってものすごくおいしい。 夜はBDS(Boycott, Divestment and Sanctions)による不買い運動についてのレクチャー(ものすごく早口でつらかった・・・。例によって聞き取れたところのみ記述)。BDSによる不買い運動は大きく4つのセクションに分けることができる。1.アカデミック・ボイコット;大学などの研究機関でのイスラエルボイコット運動。各学会の理事にイスラエル人を選ばないなど、研究業界で孤立させる。これはある程度の成果が出ている。レクチャー後の質疑でイスラエルの大学にパレスチナ人が行くことについて質問が出たが、研究者を目指していたり、留学をするために国際的に認められる学位が必要な場合、イスラエルの大学に行かなければならない。イスラエル政府がパレスチナの大学の学位を認めないため。2.カルチュラル・ボイコット;例えば、イスラエル主催の映画祭(後から調べたらイスラエル制作の、パレスチナの現状にフェアではない映画を上映する映画祭を含む)への参加拒否。これらは海外の俳優やディレクター、セレブたちも賛同している人が一定数いる。3.スポーツ・ボイコット;FIFAなど、イスラエルが参加するスポーツ大会へのボイコットを行う。これは残念ながら今のところあまりうまくいっていない。しばらく前に、ガザ出身で西岸地区でプレイし、パレスチナ代表にもなったサッカー選手がいたが、彼はイスラエルに3年拘束されてしまった。その後彼はハンガーストライキを決行。普通、長期に渡るハンガーストライキの場合、サプリメントなどは服用し、体力が過度に落ちないようにするが、彼はサッカー選手なのにもかかわらず、水と塩の摂取のみで行った。61日後、彼は亡くなった。
	4.消費者ボイコット;これが一番大きな運動。イスラエル産のものの不買い運動はかなり浸透している(注:欧州では特に距離が近いこともあってイスラエル産の野菜や果物がたくさん売られている)が、そのことに気づいた輸入業者が、'97～99年にかけて、卑怯な手を使うようになった。イスラエル(ソロモン)産のデーツを一旦南アフリカに送り、そこで箱詰めすることにより、"product of Israel"(イスラエル産)という表記をなくし、"packaged in South Africa"(南アフリカ産)として売り出したのだ。 アグレスコ(イスラエルの青果輸入会社)に反対するフラッシュモブをスーパーの前で行うなどの運動も行われている。
	食品以外には、G4S(セキュリティ会社)へのボイコット。G4Sはイスラエルとの契約でイスラエル軍占領地下のパレスチナ人の管理などを請け負っている。G4Sは空港などの警備をおこなていることも多いが、クウェートの空港でもG4Sを利用していた時期があった。しかし、同じアラブ諸国ということで、BDSがパレスチナの現状やG4Sの影響などを伝えて働きかけた結果、別な警備会社へ変更になった。また、ヒューレット・パッカード(Hewlett-Packard)はチェックポイントのコンピューター・システムを担っているため、ボイコット運動の対象となっている。他にもキャタピラー(Caterpillar)、モトローラ(Motorola)も挙げられる。化粧品会社のアハバ(Ahava)やサボン(SABON)も世界規模のイスラエル企業であり対象。最近で一番有名なのはソーダストリーム(sodastream 注:家庭で炭酸水を作るマシン)。パレスチナの違法入植地に工場がある。
	質疑応答にて、よく不買い運動のターゲットになっているコカ・コーラやマクドナルドはどうか、という質問があった。確かに、コカ・コーラ、マクドナルド、スターバックス、ネスレ、ロレアルなどは不買い運動がなされているが、BDSでは公式にはターゲットにはしていない。なぜなら、確かにそれらの企業のCOEたちはみなシオニストだが、＜企業として＞彼らがイスラエルに多額の献金をしているという明確なソースがないからだ。(大きな

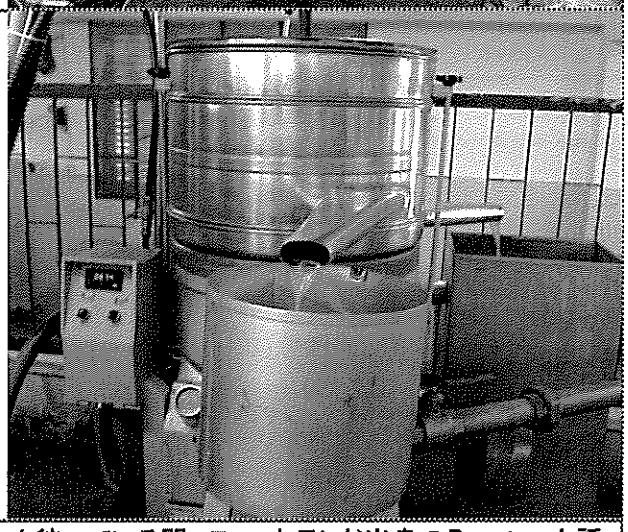
	団体ならではのしっかりとした戦略だと感じた。)
	また、参加者からの別な意見で、自分はコカ・コーラを個人的にボイコットしているが、パレスチナではコカ・コーラばかり見かけるという話から、パレスチナは国際社会と断絶状態にあり、商品を選ぶ自由がなく、コカ・コーラや、イスラエル産のものしか選ぶことができないことが非常に残念だと言っていた。しかし、現在、ベイ・サフールでイスラエルボイコットをやろうと頑張っているとのこと。紹介してくれたのは実話に基づいた"The Wanted 18"という映画。これはクレイアニメのような作品だが、ベイ・サフールで酪農をし、乳製品を自給できるようにした活動を元にしている。またパレスチナ人が置かれた状況について、やはり水の問題を取り上げ(ここでは78%が西岸地区から出ているという話だった)、天然資源ですら自分たちで管理できないのだと言っていた。また彼女自身の話として、夫がパレスチナ系ドイツ人であるのだが、彼はツーリストビザを使ってパレスチナで生活をしているので、3ヶ月ごとにドイツに戻ってビザの更新をしなければならないのだそうだ。
10月18日(土)	毎朝、Nellyが朝ごはんも用意してくれた。ピタパンとミント入りの紅茶にサラダや卵(目玉焼きorゆで卵)、チーズ、ジャムなどを日替わりで出してくれていた。飽きないようにするね、と言ってくれていた。なんという気遣い!一番気に入ったのは「ザータル」というスパイス。タイムといくつかのスパイスをブレンドしているらしい。少し酸味も感じる。ちぎったピタパンをオリーブオイルにつけ、ザータルにつけて食べる。パレスチナでかなりオーソドックスなメニューらしい。ご飯とふりかけ、みたいなイメージ?
オリーブ収穫	この日はベイ・サフールの南西、Wad Foukinにある、Mustafa Al-Hroubさんの畑で作業。Bitar Illitという入植地が畑から非常に近く、入植者たちは農家が畑に入るのを邪魔するために大きな岩を畑においてしまった。2014年2月、入植者たちが24本のオリーブの木をこの畑から抜き去ってしまった。メモや写真を見てもどうしてもいつだったか思い出せないのだが、作業に入る前に、今日は元々予定していたのとは違う側の畑で作業をする、と言われた日があった。理由は、私たちが行く前の週にイスラエル兵が来てもめたからだ、ということだった。しかし、参加者たちは、むしろそういうときのために自分たちは来ているんだから(オリエンテーションの内容参照)そこでやらせてくれ、と言った。しかし、私たちが手伝うことにより、その後で、よりこの農家に対するハラスメントの危険が高まっては困るということで結局同じ農家の別の側の畑で作業を行った。またしても、ほんの一時滞在するだけの自分たちの無力さややるせなさを感じる。
	ここの畑は、これまでで一番オリーブの実りがよい畑だった。オランダ人のHiskeやイングランド人のAlisonと震災後の原発事故被害について話す。オリバーとは相変わらずふざけあいっこ。オリーブの実に葉っぱを刺してうさぎさんだよ〜と可愛いことをしているかと思えば、I'll kill him!(殺してやるー!)と石で潰してしまう。ちゅ、中学生・・・!(世界共通!)と思う。木登りにもすっかり慣れた。木の上でオリバーとオリーブの実をぶつけ合うのもいつものこと。キプロス出身のディミトゥラ、フランスから友達二人で参加していたクレアとサビーンは年も近く、いい友人になれた。このころにはこのグループのほとんどの人とすっかり仲良くなり(私の方で名前と顔が一致しなくても、唯一の東洋人である私のことはみんな覚えてくれていたので笑)、とてもよい雰囲気。プログラムがあと2日で終わってしまうことが残念でしかたがない。収穫量は500kgの実から90kgのオイル。
	昼食は農家のおうちでいただくことになっていたが、移動しようとしていると、ロビンが補聴器をなくしてしまったという!実は昨年の参加者にも同じく補聴器をなくしてしまった人がいたらしいが、見つかったということで、みんなで横一列になって目を皿のようにして探す。しかし、残念ながら見つけることはできなかった。Poor Robyn…

	 木登り大得意！	 オリーブ畑
	食事のあと、この農家から本当に目の前まで迫っている入植地を見る。入植地側の畑でパレスチナ人の子どもが遊んでいると、畑の中（つまり自分の敷地内）なのにもかかわらずイスラエル兵がやってくる、とのこと。バスに乗った後もこの入植地に沿った道路を走ったのだが、ここの分離壁は少しタイプが異なったものだった。単なるコンクリート製ではなく、数種類のブロックを使い、「デザインに優れた」ものなのだ。さらに、分離壁が道路側（パレスチナ側）にくの字に曲がっている場所がある。これらは入植者たちがパレスチナ人を気にせず、美しい景観を楽しむことができるように、ということ。	
ARIJでのレクチャー	ARIJ（ The Applied Research Institute Jerusalem）での地政学のレクチャー。この施設ではYoopのホストファミリーが働いているという。Yoopは7回同じファミリーに滞在しているとのことで、今は社会人になった彼女も、最初の時はまだ小学生だったんだよ、と言っていた。Yoopと一緒に彼女のオフィスもちらっと見せてもらう。	
	大変残念なことに、このARIJでのレクチャーを聞き取ったりメモしたりする体力がほとんど残されてなかった（途中何度か眠ってしまった・・・）ので、詳細はなし。覚えているのは、ここでもエリアABCの話を詳しく聞いたのだが、レクチャラーが参加者に「みんなインドネシアの地図を見たことがあるか」と聞いた。マレーシアは島が連なってできた国で、それぞれの島を行き来するには間に海があるため、船に乗るなどしなければならず、地続きであるよりも大変。そしてパレスチナは、海（Sea）の代わりにエリアCがあるのだ、と言っていた。パレスチナは当然途中に海を挟まず地続きであるが、パレスチナ人が暮らす部分（エリアAやB）は、エリアCに阻まれて飛び地になっているのだ。途中にチェックポイントがあれば、自由に行き来することはできない。仕事や通学のたびにチェックポイントをつ通らなければならない人（毎回、どれだけ時間がかかるだろう）、隣町に住む親戚に自由に会うことができない人はパレスチナにはいくらでもいるのだ。 また、国際社会のダブルスタンダードについても述べていた。ダブスタはどこにでもあるが、パレスチナのケースは大変明確である。	
	レクチャーよりもよく覚えているのは大変盛り上がった質疑応答の一場面。レクチャラーが、オスロ和平合意はパレスチナ人にとって求めていたものではなかったが、インターナショナルに決められたことだし、どんなにおかしくて最悪なことでも、オスロでエリアAはパレスチナだと認められるようになったことは事実だ、と言ったことをきっかけに参加者との間で議論が紛糾。そのことは事実かもしれないが、一方でそのことが、イスラエル当局が自分たちはパレスチナを占領していない、と主張することの根拠にされているのも事実ではないか、と。その中でレクチャラーが「パレスチナが完全に独立国家になること	

	は可能だと思うか」というような質問をした。当然議論はさらに激しくなる(もちろんちゃんとした「議論」で喧嘩ではない)。レクチャラーはかなり冷静(というかどちらかというと悲観的?)な意見を出し、それに参加者が反対する形。印象的だったのは、レクチャラーが議論が最高潮に達したところで言った言葉。「ヤッラ!酒をいっぱいおごってくれれば俺はいくらでも理想のパレスチナについての持論を、それこそ夜が明けるまで話すよ。本当に、実際の俺はものすごく夢を語る人間なんだ。でも今日は仕事だからな」。彼のニヤリと笑った言い方や、タイミングなどから、その場は和やかになり、拍手喝采で終わった。でも、後から考えると、その彼の仕事と本音の板挟みのところがとても重要で、そのどち
	らも抱える「彼自身」の言葉を聞いてみたいと思った。帰りに、西岸地区の大きな地図をもらう。エリアABCが色分けされたり、チェックポイントの位置が分かるもの。帰国後のプレゼンで非常に活躍している。
オリーブ搾油工場	ベイサフールへの帰り道、オリーブオイル工場へ立ち寄った。



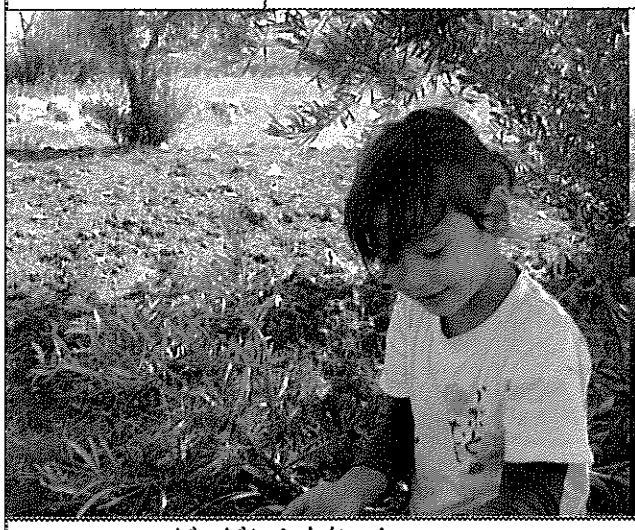




	工場の外で他の人たちが出てくるのを待っている間、スコットランド出身のPrestonと話す。日本の話になり、ガザではイスラエルの兵器の残骸と思われる中にSony製の部品があったということを話す。彼は日本は最悪だな!と冗談めかして言ってくれたが、本当に最悪だと思う。
	ATGのオフィスからロビンと歩いて家まで帰る。途中、家の向かいの商店より大きめなスーパーマーケットを覗いてみる。私は外国でスーパーに行くのが好きで面白かったが、やはりほとんどの製品が欧米からの輸入品だった。甘くない飲むヨーグルトを飲みながら帰る。途中でベイ・サフール病院という小さなクリニックを見かけるが、そこの壁に「日本大使館の協力により、産科の改善を行うことができた」という看板が掲げられていた。お

	しゃべりをしながら歩いていると、ある家のフェンスに手のひらにのる小ささのウリのような実がなる植物が這わせてあった。二人でしばらく頭をひねるも、このときは正体がわからず（実は次の日に偶然にも発覚するのだが）。
	帰宅、休憩、シャワー、夕食。この日は非常に手が込んだメニュー。一度ローストしたチキンとそこからでた肉汁を塗ったピタパンに乗せて再びオーブンで焼き、ローストアーモンドをちらしたもの。
Night Program 子どもの権利	Ayed Abu Eqtaishによるパレスチナの子どもの権利や拘留問題、拷問に関するレクチャー。こちらも疲労から全体を聞けたとは言えず。以下文脈はほぼ無視し、箇条書き。これまで、500以上の10歳以下のパレスチナ人の子どもたちが拷問を受けた。国籍の違いで差別がある。心理学によるケアが必要。イスラエル兵によるパレスチナ人の子どもに対する交流は主に12～18歳がターゲットにされている（18歳で法律が変わる）。しかし、6−7歳で拘留されることもあるという。「国際法」は、必ずしもフェアなわけではない。パレスチナでは、人間の盾として以前は子どもを前にしていたが、今ではそれが機能きなくなった。イスラエルが子どもでもかまわず攻撃してくるからである。
10月19日（日）	プログラム最後の日。この朝いつものようにATGのオフィスに集合すると、日本人と思われる親子が。今日だけ参加するという。お母さんの史歩さんと、6歳の萌菜（ムナ）ちゃん。ムナちゃんのパパはパレスチナ人で、エルサレムに住んでいるとのこと。オリーブ収穫を体験させたくて参加したとのことだった。会った瞬間からムナちゃんとは仲良し！他の参加者たちからは（日本人同士ということもあって）前から面識があったのだと思われていた。今日初めて会ったというとみんなから驚かれ、スイス人のUrlikeやオリバーのお母さんのAngelaからは、「オリバーとも仲良しだし、昨日も子どもたちに囲まれてたし、ユキは魔法が使えるの？」と言われた。私の方が、遊んでもらってるんですよ～
オリーブ収穫	ベイ・サフールの東、Teqou'にあるBaker Askarさんの畑で作業。この畑はイスラエル軍キャンプと監視塔から100−150mの距離にあり、いつも兵士によって畑に立ち入ることを邪魔されている。Teqouという入植地が1km圏内に建設され、拡大の危機（さらに農地を失う恐れ）に脅かされている。
	とても広いが、まだ若い木ばかりの畑。背丈ほどの木も多い。この日はパレスチナの女性たちも多かった。小学生ぐらいの女の子たちも多い。オリバーはアユという同世代の男の子と仲良くなっていた（アユはなぜかオリバーをリチャードという名前だと思っていたようだが）。この日はほぼムナちゃんと遊びながらの作業。パレスチナの学校に行っているのでアラビア語と日本語は完璧にバイリンガル。「ムナ」というのはパレスチナでメジャーな名前らしく、（私と日本語で話していたので）パレスチナ人から英語で名前を聞かれ、ムナと答えると、パレスチナの名前じゃん！と言われていた。その後アラビア語で話し出すムナちゃんは大人気だった。私はときどきアラビア語と日本語の通訳をしてもらえた（というか、久々に日本語で話せて嬉しかった！）。
	ムナちゃんにかかれば、オリーブ畑は小さな街に早変わり。あっちの木はおうち、こっちは学校。枝がかばんやお弁当に変わる。私が収穫作業に集中しすぎると、「ユキ！今日も学校お休みするの？！もうすぐテストだよ！」と怒られてしまった。ちなみに遠足にはばっちり参加した。この日もけん玉を持って行っていたので、アヨたちとも遊ぶ。
	もうしばらくすると（おままごとではなく本物の）お昼という時間になって、滞在中初めての雨が降る。パレスチナは雨季と乾季に分かれているが、10月の終わりから雨季に入り、冬の季節がやってくるのだそうだ。オリーブ畑の土壌は粘土質で、雨が降ると途端にぬかるんでしまう。最後の日にある意味よい体験。農家のおうちへ引き上げる。

この日のランチは最終日だったからか(あるいは食事を作ってくれた方がものすごく料理好きで人にパレスチナ料理を教えるほどの腕前だったからなのか)、ものすごく豪華。ファラフェル、フムス、ババガヌーシュ(ナスのペースト)、サラダ、釜で手焼きしたピタパンなどなど。ここでようやくオリーブの塩漬けを食べることができた。オリーブの収穫に行くのだから、たくさんオリーブを食べるぞ!と意気込んでパレスチナにやってきたのだが、考えてみればオリーブは梅の実ように生食できず、絞ってオイルにするか、塩漬け(ピクルス)にしてから食べなければならない。だから、収穫の時期は食べられるオリーブが一番ない時期なのだ!Nellyも家で漬けていたが、前シーズンのものは食べきってしまっていたので、冬までお預け、と言われていたのだった。市販されているオリーブは強烈な渋を抜くために苛性ソーダを使う。しかしパレスチナでは各家庭で塩漬けにしてゆっくり渋を抜く。レモンやスパイスの配合でそれぞれの家の味が異なるそうだ。正に梅干しと一緒!ここでいただいたオリーブは渋みがかすかに残る、ちょっとワイルドな味。とってもおいしい。最後には手作りのはちみつケーキまで振舞われた。みんなお腹いっぱい。



ハビービ! ムナちゃん

ご馳走に群がる!

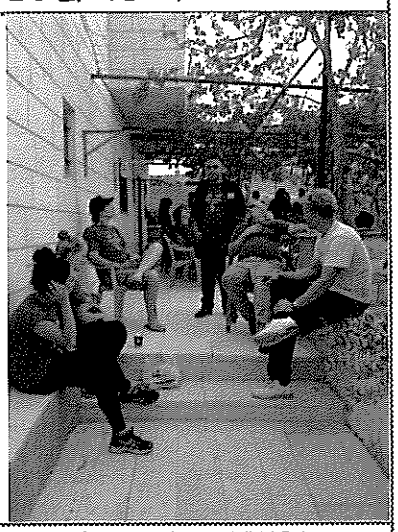
この家はとても大きく、お庭も綺麗だった。ブーゲンビリアが鮮やかに咲いている。裏手に回るとアユとオリバーが遊んでいる。黒いしわしわした直径4-5cmの実を石で割っていたのだが、中身を見てびっくり。パッションフルーツだった。彼らの前の植物をよく見ると、まだ熟していない実もなっていたのだが、なんとそれが昨日ロビンと見た実だった。パッションフルーツの花は見たことがあったが(このときも幾つかまだ花も咲いていた)、実がなっているところを見たのは初めて。パッションフルーツは熟すと中が空洞になるので(あおいうちはとても硬い)、平たいところで上から石で叩くとパン!という良い音と共に裂け目ができ、そこから半分に割って食べる。もちろん私も味見。その後嬉しくなってロビンにも見せに行った。みんなゆっくりおしゃべりしながら食後の時間を過ごす。明日帰るなんて信じられない。

バスでベイ・サフールまで戻る。道中、史歩さんとおしゃべり。史歩さんがパレスチナで暮らすようになったきっかけから始まり、私自身ことを話すうちに日本のキリスト教のことにも話題が飛ぶ。正直に言って、日本のクリスチャンは無意識にシオニストである人が多い(パレスチナのことなど何も知らず、無邪気に信仰深いつもりで「聖地」旅行に出かける人があまりにも多い)ことを告げると、史歩さんはエルサレムのヘブライ大学に牧師で留学している人と会ったことがあるが、彼がアラブ人には会ったことがない、と言ったと非常に怒っていた。私もあまりの衝撃に言葉を失ったほど。でもそれが「日本のキリスト教」を端的に表しているとも思う。史歩さんとはもっと話をしたかったがYMCAに到着した

ので時間切れ。ムナちゃんと史歩さんとはここでお別れ。写真を一緒に撮って、連絡先を交換する。街まで戻るというバスに史歩さんたちは乗せてもらって友人に会いに行くという。見えなくなるまで窓からずっと手を振ってくれていたムナちゃん、なんて可愛いの！（日本に帰ってから何度かメールのやり取りをした。またぜひ会いたい！）

左：オリーバーとアユ
悪ガキふたり！

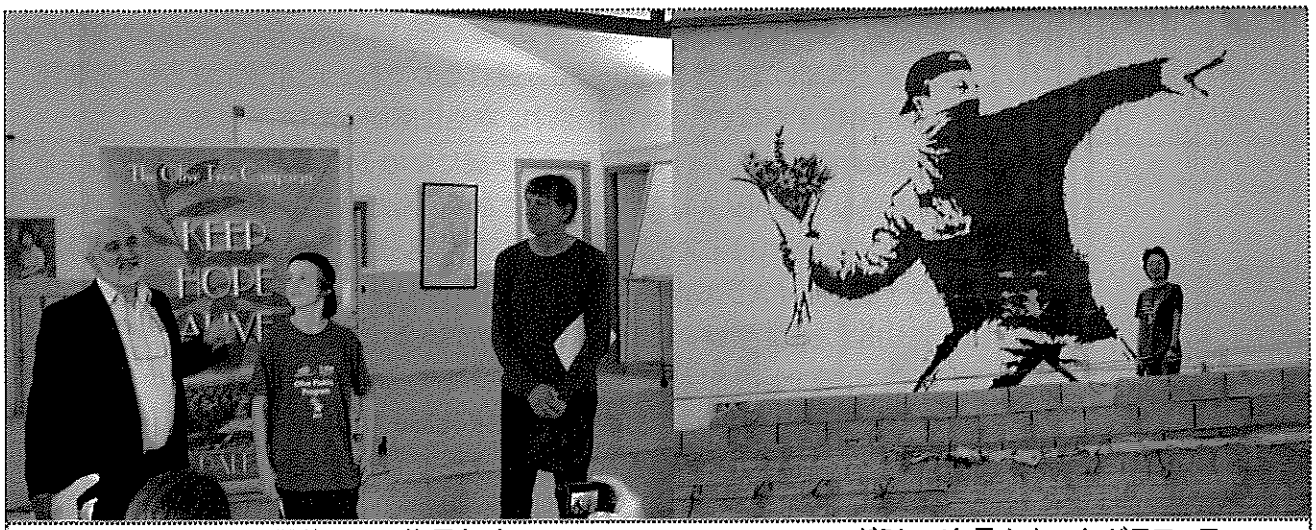
右：午後のひととき



ホテルグループも合流し、まとめのセッション。リーダーとして東エルサレムYWCAのローレンが来てくれていた。参加者のうち数人が、自分の住む地域でやっているパレスチナ支援活動について簡単にプレゼン。これから帰って、それぞれの場所でする支援の参考にしてほしいとのこと。その後席の近い人同士でグループセッションとなった。イングランド人のGeoff、スイス人のNicolas、オランダ人のMark、スロベニア人のGregaと話すが、与えられた時間はわずか10分（ほとんど何も話せなかった）。このプログラム全体について言えることだが、コーディネーターたちはできるだけパレスチナについて知ってもらいたいのだろう、非常にインプットの多いスケジュールだった。アウトプットを全体でする時間はここだけ。後はレクチャーの時の質疑応答か、収穫作業をしながらのおしゃべりのみ。この10日間、消化不良の思いがあったのはこの点だ。私自身が英語で複雑な議論をすることが能力的にできないということも大きいのだが、参加者たちと本当は話したい話題があった。それは、自分の国籍と、その意味について。最初に書いたが、参加者はほぼ欧米からの参加で、90%は白人だった。英国はもちろんのこと、いわゆる「列強」と呼ばれ、植民地主義を行ってきた国から来た人も多い。その人たちが、どんな気持ちで、このプログラムに参加をしているのか、自分の立ち位置をどのように認識し、パレスチナあるいはイスラエルとの関係に何を感じているのか聞きたかったのだ。

繰り返し書いてきたように、私はイスラエルのことを知れば知るほど日本とシンクロしていることがつらかった。私はパレスチナの地で、自分が暮らす「国」のことを何度も思い出した。在日朝鮮人の友人たちのこと、沖縄を始めとする米軍基地を抱えさせられている地域のこと、三里塚、愛国心を煽るメディアや教育、強者にのみ有利に作られている法律・・・挙げればきりがない。そのような差別と抑圧と暴力の構造において、私は日本国籍を持ち東京に暮らす者として圧倒的に抑圧者の立場にある（もちろん、私にも被抑圧者としての側面もあるが、それは抑圧者であることの言い訳にはならない）。イスラエルと私は、構造上同じ場所にいる。さらにもっと直接的に、現在の日本政府はイスラエルを仲間として認識し、パレスチナ抑圧に加担している。私は日本政府のあり方に反対しているが、私がその政府を変えられていないことも事実である。あるいは私はクリスチャンとして、クリスチャンシオニストの存在を無視することはできない。「彼らは私とは違う」と言うことは簡単だが、それは「クリスチャンシオニストたちがパレスチナにしている暴力は

	自分とは無関係だ」と言うことと同じだ。私の今の立ち位置は、必ずしも私が望んで選び取った場ではないが、でも、そこに立っているのだ。暴力を振るう側の人間として。そのことを、他の参加者たちは引き受けているのだろう?どう折り合いをつけているのだろう?ずっと疑問だったのだ。しかし聞けないままにプログラムは終わってしまった。もっとたくさん話したら違った結果が得られたかもしれないが、私の印象は、そんなこと考えていない、という印象。話してもいないのにそう結論づけるのはあまりにも卑怯だと自分でも思う。でも、全体の雰囲気を、プログラム参加中の私は感じ取ってしまった。
	これまで書いてきたことで伝わっていてくれると嬉しいが、参加者たちはみなとっても素敵な人たちだ。よい友人になったし、また会いたいと思える人ばかり。それはまごう事なき事実としてある。しかし、ちゃんと議論についていけなかったくせに上から目線を承知で言うと、参加者たち全体から感じたのは、「イスラエルとパレスチナの問題」に「第三者」として関わっている／関わろうとしているのではないかということだ。滞在中のレクチャーで、何度も言われてきたのは、パレスチナとイスラエルの問題は、パレスチナとイスラエルだけの問題ではない、ということだと私は思っている。その「問題」を作り出し、下支えし、継続させているのは「国際社会」と言われるものであり、その一部である私自身だ。私はパレスチナとイスラエルの問題の当事者である。抑圧者として、当事者なのだ。
	ただ、自分でもいい子ぶった答え(?)かもしれないとちょっと思うが、「消化不良」なのはよいことなのかもしれない。すっきりしてしまえば、そこへの興味が薄れてしまうような気がするからだ。これを書いていて今気づいたが、私はどうやら抑圧者としての自分への「折り合いのつけ方」が知りたかったらしい。少なくてもそのヒントを。でも、きっと折り合いなんて一生つかないし、つけてしまったらそこで終わりな気もする。自分が抑圧者であるというしんどい事実を抱えて、もやもやしながら四苦八苦し、(抑圧者でなくなることなんてできないので)なんとかせめて今以上に自分が誰かに暴力を振るうことがないように必死になったり、この叩こうが蹴ろうがびくともしない「構造」をほんのちょっとでも変えるにはどうしたらいいか考え続けることが、私には必要なのだと思う。抑圧者である私ができる、せめてもの責任の取り方がこれだからだ。
	一度解散。サハラホテルに郵便局が来てくれるので、送ってしまいたいものがある人は16:30に集合とのこと。これは、空港での手荷物チェックで反イスラエルのプログラムに参加していることが分かると面倒なので、資料などは郵送するのが一番安全、という配慮から。私とロビンは朝のうちに郵送する荷物をまとめていたので、イブラヒムと一緒にサハラホテルへ直行。ホテルのロビーでしばらく休憩していると、Hiskeがいるのを見つける。私がパレスチナでやりたいことの一つに、Banksyのグラフィティを見ることがあった。しかしなかなか時間を取れず、場所も見つけられずにいたのだが、HiskeがFacebookに投稿しているのを見て(みんなプログラム中からがんがんFacebookを使っていた)、どこにあるのか聞くとサハラホテルの近くだという。詳しい場所を聞くと、わざわざ連れて行ってくれた。一番見たかった、石の代わりに花束を投げようとするインティファーダのグラフィティだ。ロビンも一緒に歩くと、本当に3分ほどのところに突然現れた。思ったよりずっと大きい。ロビンと写真を撮りまくって「観光客」をやり、満足。それから、ホテルの3軒ほど隣に小さい商店があったのだが、もしかしてあるかも、と思って覗くとやっぱりあった。朝ごはんで食べていたザータルを買う。



まとめのセッションの オリバーと参加最多

最後に、歴代最年少の のユップが表彰された

どうしても見たかったグラフィティ

荷物郵送	ホテルに戻ると郵送の受付を始めていた。ここでの注意点いくつか。1.郵送用の箱は不要。住所を書く紙とビニール袋が渡され、それに入れると、郵便局の方で箱詰めして送ってくれる。なので、壊れ物は入れないほうがよいのと、ポスターなどは自分で折りたたんでおく方がよい。私はシステムがいまいちわかっておらず、もらった大きな地図はものすごーく大雑把におられていた。2.ATGからはEMSか普通便かが選べると言われていたが、受付時特に確認されることがなく、確認されなかったからきっと普通便だろうと後から思っていたら実はEMSになっていて、帰国後すぐ(1週間くらい?)で届いてびっくりした。どうりで高いわけだ・・・。当然ながら距離と重さで料金が変わるので注意。どうやらEMS一択で郵便局のスタッフはどんどん荷物を受け付けていたが、通常便が良い人は郵便局スタッフに直接確認したほうがよい。なお、荷物は一度エルサレムへ送られ、イスラエル経由で発送されるのだそうだ。
	帰宅し、パッキングなど。最後の夕食は、前の日にNellyにムスリムは豚肉を食べないのは知ってるけど、パレスチナではクリスチャンも食べないの?と聞いていたからか、ポークロースト。やっぱり美味しい。Nelly、ザッキー!シュクラン!
Cultural night and farewell party	19:00にYMCAに集まり、お別れ会。地元の青年たちによる民族舞踊の披露や、プロによるパレスチナ民族音楽のコンサート。伝統楽器がものすごくカッコよかった。とても盛り上がり、スタッフが歌ったり、踊り出す参加者もたくさんいた。ホテルグループのおじちゃんのダンスが(多分狙ったわけではないのだろうが)コミカルで大受け。
	あっと言う間に時間が経ち、クロージングへ。みんな連絡先を交換しあったり、写真を撮ったりしてなごりを惜しむ。オリバーとは何度も泣き真似をしながらバーイ、と言い合った。そのまま帰るつもりでいたが、誘われて飲みに行くことに。ロビンも一緒。どうやら若手はよく飲みに来ていたらしいカフェ・バーに着くと、思いの他たくさんの参加者が残っていた。最後の晩だけあって、しゃべりっぱなし笑いっぱなし。パレスチナ・ビールや、レモンとミントのソフトドリンクを飲む。最後の最後でナルギーラも吸うことができた。シェアしてくれたGregaありがとう。彼と私は帰りの飛行機の時間が近く、朝5時に迎えがくることになっていたのだが、1時の時点で全然パッキングしていない、と言っていた。
	Yoopと彼のルームメイトも来ていたので、4人でタクシーに乗って帰る。着いたのは2時くらい?ほんの数時間、仮眠。寝る前にロビンが行く時は声かけてね!と言っていたが、結局彼女は寝たままで、ちゃんとお別れできなかった。早朝にもかかわらず、Williamが起きてくれて、お茶を入れてくれた。彼は私を本当に自分の子どものように可愛がってくれ

	た。真っ暗でものすごく静かな中、迎えを待つ。星が輝いていた。先にGregaをピックアップしてから来るとは聞いていたが、20～30分遅れたのでちょっと不安になるも、無事迎えがくる。Nellyも起きてくれて、ついにお別れ。本当に感謝してもしきれない。
	Gregaは結局あの後ルームメイトのNicolasと一緒に女の子のボランティアスタッフを家まで送り、一睡もしてないらしい。荷物は適当にぶち込んだ、と言っていた。ドライバーは私の聞き間違いでなければイスラエル人で、お連れ合いがパレスチナ人だという。本来、パレスチナ側からイスラエルへ入るのは大変なのだが、すごい「テクニック」を見せてくれた。走り出すとまず彼はダビデの星がついたストラップをぶら下げた。チェックポイントに着く直前で、寝たふりをしろと言われ、ゲートを通過する一瞬だけヘブライ語のラジオをかけていた。それが2～3度あり、ものすごくスムーズに空港まで到着。タクシー代を払うときにちょっとトラブル。私が大きい額の紙幣しかもっておらず、Gregaに20ドルほど借りることに。
	それぞれチェックインカウンターの場所が違うので、向こう側で会うことにして一度別れる。ベン・グリオン空港内はwi-fiが通じるので、facebookのチャットでやり取りできて便利だった。いよいよ、恐れていた手続き。まず、荷物のX線検査の前で並んでいるときにインタビュー。若い女性二人。たぶん兵役中。どこに行ってきたのか、どこに泊まっていたのかという質問の他に、誰かがあなたに接触してこようとしたことはないか、何か荷物を受け取らなかったかと続き、パッキングしたのはどこかと聞かれる。ホテルと答えると、ホテルのどこか、部屋の中か、一人でしたのかと続いたので、思わずちょっと笑ってしまうと、私たちは大切なことを聞いているんです、テロリストに利用される可能性があるんですから、と怒られてしまった。質問中、パスポートは向こうが持ったまま。ここで待ってくださいと言われ、5mほど離れたところで二人で話しをしている。多分全然関係ないこと話してるんだろうなと想像しつつ、1分ほどでOKと言われて次へ。荷物をX線に通すと、ここに並べと言われて預け荷物のチェック。「ユダヤ人」以外は全員チェックを受けている印象。バックパックを開け、機械類を取り出すよう言われ、何かコップを洗うための柄の長いスポンジのようなものを突っ込まれる。チェックしているのは金属や、細かい持ち物の検査というよりも、火薬か何かの反応をしらべているようだった（少なくても建前上は）。ベツレヘムで買ったカーペットの袋もチェックされたが特に何も言われない。ほぼ全てのファスナーを開けられる。荷物を元に戻して待つように言われ、3分ほど待つとOKが出る。チェックインカウンターまで誘導。ただしただしチェックイン開始まで10分ほど早かったのでバックパックは一度預かられ、チェックインが始まったら声をかけるように言われる。チェックイン自体は何も問題なし。ここまでで多分1時間ほど。
	チェックイン後Gregaを探すがいないので出国審査へ並ぶと彼も並んでいた。結構手間取っている様子。チェックインのときもそうだったが、一人一人に時間がかかるので列が進むのが遅い。今度は手荷物の検査なのだが、これも全部のポケットやポーチを開けられ、同じ棒で撫で回している。やはり時々また待たされるものの、通過。パスポートコントロール。かなりびびって、進まない列に並びながらジリジリしていたのだが、なんと無言でちらっとパスポートを見るぐらいで終了。拍子抜け。しかし考えてみれば、そもそものセキュリティレベルが高すぎるのだ。ものすごく差別的な理由によって。先に中に入っていたGregaと落ち合う。彼の便のほうが早く、空港に着いた時はコーヒーでも飲もうか、と言っていたがなんだかんだで時間がかかってしまったので彼はそのままゲートへ。ちなみに借りていた20ドルは小さい土産物屋では釣りがでないと言われてしまい、返すことができなかった。次回会った時何かおごるから！と言って別れる。

	私は時間を持て余してしまったし、空港でお金を使うのは嫌だったがお腹がすいてきていしまっていたので、フードコートでデニッシュとコーヒーを買う。その後ちょっと探検。フードコートのスシバーはヤマサのマーク入り。もう買えない。土産物屋には出店時話題になっていたサンリオの顔、キティちゃんも。イスラエルの旗を持ち、ばっちりシオニストの顔をしたご当地キティ。シャローム（平和）と書かれた山積みのキーホルダーや、聖地グッズなど。辟易。そうこうするうちに時間も近づいたのでゲートに行くが、搭乗時間の遅れあり。その間にスマホでネットをチェックしていて驚愕。私は滞在中、写真投稿アプリに#Palestineというハッシュタグをつけてアップしていたのだが、自分が投稿した写真をみるページにアクセスできないのだ。調べてみるとベン・グリオン空港は独自のセキュリティシステムを持っているらしく、パレスチナ関係のサイトが閲覧できなくなっているようだ。今思うとwi-fiが無料なのも結構怖いことだったのかもしれない。
	ようやく搭乗。周りはほぼ全て仮庵祭に来ていたと思われるユダヤ系アメリカ人たちだった。居心地が悪いといったらない。再びイスタンブールでトランジット。今度は7時間。そしてなんとか家へと帰り着いた。
	帰ってからしばらく、時間が止まっているようだった。というか、パレスチナで起こっていることとは全く無関係にすごいスピードで進んで行く日本の社会と、パレスチナに行く前にはそのスピードに曲がりなりにも乗っていた自分に対して呆然としていたのだろうと思う。これから先、私はどのようにパレスチナと関わっていくのか。この報告書を10年後、20年後に読んだ自分に先回りして聞いておく。まだ、「折り合い」をつけずにやっているか、と。